

---

# バイセクシュアル

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バイセクシュアル

### 【NZコード】

N5412D

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

電車の中で見掛けた少年に恋した主人公はその少年に接触することを試みるが・・・。毎日が波乱に満ちた同性愛（？）の物語。主人公の恋の行方は？

## Story 1・男になりました

私、澤田 有紀檸は、学校に行く途中、電車の中で恋をした。

相手は同じ学校で隣のクラスに居る黒田 新一。

最初はただ見ているだけで良かつた。でも、そもそも行かなくなつた。

彼を向かい側の席に座つて眺めていると、途中から乗ってきた長髪でつり目の女と仲良くお喋りを始めたのだ。

ム力付いた私は、彼を手に入れる為、彼に接触する事を試みたのだが・・・。

キンコンカンカンとチャイムが鳴り、放課後を迎えた私は、階段の前で双子の弟、澤田 有紀雄と彼を待ち伏せしていた。

何故この面子なのかを簡単に説明すると、有紀雄が彼と大親友だからである。

「姉貴、出て来たぞ」

私は角に隠れて教室の方を見た。

その先には教室から出て来たばかりの彼の姿が在つた。隣には今朝見た女が居る。

「おつ、夏奈子ちゃん、今日も可愛いなあ」

真田 夏奈子。有紀雄の情報によると、新一の彼女らしい。

私はスッと前に出て態と新一にぶつかろうとした。

だがぶつかつたのは、隣に居た彼女の方だった。

その瞬間、私は凍りついた。

何故なら、ぶつかつた拍子に私の唇と彼女の唇が重なつていたからだ。

「夏奈子、そつちだつたのかお前？」  
言つて後退る新一。

「悪い、夏奈子。俺、もつお前と付き合えない」  
新一は踵を返して駆け出した。

「え、一寸新一！？」

我に返った夏奈子は振り向いたが、既に新一はいなかつた。  
「ああ、もう！どうしてくれんのよ！？」

怒った夏奈子が私に向き直り、物凄い剣幕で睨む。  
「スマン。まさかこうなるとは思つてもいなかつた。許してくれ」  
私はそう言つて頭を下げた。

「はあ」

夏奈子は溜め息を吐いた。

「顔上げて頂戴」

私は恐る恐る顔を上げた。

まじまじと見つめる夏奈子。

「あんた、意外と可愛いのね。決めた。あんた、私と付き合になさい」

夏奈子はバイセクショナルだった。

「否、私は黒田くんと・・・」

「あんなどうしようとも無い奴どらだつて良いのよ。だから私と付き合いなさい、ね？」

「助けて有紀雄」

私は振り向き様にそう言つた。

すると有紀雄が顔を出して「じゃあくじ」と手を振つて去る。

「薄情者！」

「ねえ、返事聞かせてよ」

「どうしたら良いんだ私は。」

「ねえ、返事<sup>うつせ</sup>」

「ああつ、五月蠅えなもう！解つたよ、付き合えば良いんだが、付き合えば！」

その時、私は後悔した。言つてはいけない禁断の言葉を口にしてしまつた事に。

「あら、別に男口調真似なくても良いのよ？」

「否、真似てる訳じゃなくて、元々がこう言つて口調なんだ」

「ふうん。まあ良いわ。私、真田 夏奈子。宜しくね」

「澤田 有紀檸だ」

「何自己紹介してんだ私は！？」

「え、あんたが澤田 有紀檸？」

「知つてんの？」

「知つてるわよ。だつてあんた巷ちまたじゃ有名だもん。夜な夜な町を徘徊しては不良共に喧嘩を売つてボコボコにしている不良女子高生つてね」

「飽くまで噂だろ？」

「そうだけどね。所で、もう帰り？」

私は持つていた鞄を見せた。

「じゃあさ、これから何処か遊びに行こうよ。デートよ、デートに行かざるを得ないのか私は。

「別に構わないけど・・・」

他に選択肢が見付からなかつた私はそう答えていた。

「じゃあ決まり。何処に行く？」

何処でも良い。勝手に決めてくれ。

「そうだ、商店街なんかどうお？あそこに新しい洋服屋が出来たから行つてみたいのよね」

「ああ、良いけど」

「じゃあ決まり。レッツゴー！」

言つて夏奈子は私の手を掴んで歩き出した。

商店街に着くと、新しく出来たと言つ洋服屋に私たちは入店した。

「ねえねえ、これ可愛いと思わない？」

夏奈子が私にそう訊ねた。

手にしていてるのは水玉柄のワンピース。

「着てみれば？似合つんじゃねえか？」

つて、私は何を答えていいのだろうか。

「そりあ？じゃあ試着してみるね」

言つて試着室に入つていく夏奈子。

暫くして、着替え終えた夏奈子が試着室のカーテン開けた。

「有紀檸、どうお？」

「可愛いと思つぞ」

「本当？じゃあこれにしよ。有紀檸」

「私が払うのか？」

「当然でしょ。有紀檸は私の彼氏？否、彼女？・どっちだ

夏奈子の頭がショートした。今なら逃げられるだろうが、何故か

そりしなかつた。

「どっちでも良いけどさ、買つてやるから早く着替えひよ

「うん」

夏奈子はカーテンをして制服に戻し、再びカーテンを開けた。

「次はあんたね」

「え、私も買うの？」

「そりよ。だから選んで来なさいよ」

「あ、ああ」

私はそり返事をすると、男性用の服が有る所に移動して物色を始めた。

背中にドクロのマークが入つた革ジャンにジーンズ、それと適当なTシャツを選んで手に取る。

「それ、巷でよく不良が着てるよね」

いつの間にか側に居た夏奈子がそり言つた。

「変か？」

夏奈子は首を横に振るつて答える。

「有紀檸なら何着ても似合つよ。ほら」と背中を押されて試着室に入れられる。

私はカーテンを閉めて着替えると、カーテンをオープンした。

「似合つよ、有紀櫻」

「お世辞有り難う」

「お世辞じゃなくて率直な感想だよ」

私は試着室の鏡で確認した。格好良い。

「これ買おう」

気に入った私はそう口にしていた。

私はカーテンをすると、制服に戻してカーテンを開けた。

「次下着コーナーね」

「あ、ああ」

私はそう返事して夏奈子と共に下着コーナーへ移動した。

「あ、これ可愛い」

と夏奈子が手にしたのは、お尻にたれパンダの絵が描かれた女性用のパンツだつた。

「欲しいのか？」

「なつ、そんな訳無いでしょ！」

夏奈子は頬を赤くしながら慌てて戻した。

「欲しいなら買つてやるが」

「要らないわよ！」

「あ、そ」

私は夏奈子が置いたパンツを手にした。

「へえ、あんたもそう言う所あるんだ？」

「否、私はスペツ派だから」

「スペツ？」

「あれ穿いてると動きやすいんだ」

言つて私はスペツを手に取つた。

「ふうん。私はスペツは穿かないなあ

「どうでも良いけど、早く買おうぜ」

「一寸待つて」

言つて夏奈子はブレジャーのある所へ行つてそれを手にすると戻つて来た。

「はい、これ。あなたの分」

と渡されたのは、白いブラジャーだった。

「私、未だノーブラなんだ」

「うーん、よく見たらあんた俎板ね  
グサッ！」

心に矢が突き刺さつた。

「ごめん、気にしてた？」

「否、そんな事無いけど」

と言つては100%嘘になる。

「・・・あんた、本当は男なんじゃない?じゃなかつたら俎板つて  
言われた時点で傷付くものね」

否、傷付いてます。ただそれを表に出さないだけだ。

「何言つてんだよ。私は正真正銘女だ」

言つて私は夏奈子の手の平を自分の股間に当てがつた。

「なつ、何処触らせてんのよ!？」

夏奈子は頬を赤くした。

「同性なんだから良いだろ」

「それもそうね」

と納得して冷静になる夏奈子。懐柔に成功した様だ。

「それより早く買おうぜ」

「そうだつたわね」

私たちはレジまで行き、会計を済ませる。勿論、払ったのは私だ。

「有紀檸」

と店から出て少し歩いた所で夏奈子が声を掛ける。

「何だ?」

「恋愛公園寄つて行かない?」

恋愛公園か。あそこには確か、桜の木があつたな。その木の下でお互いが口付けを交わすと永遠に結ばれると言つ伝説がある公園。つて、待て。私は女だぞ。大丈夫なのか?

「ねえ、行こうよ」

「そうだな」

「私たちは商店街を離れ、恋愛公園にやつて來た。

「ねえ、知つてる？あの桜の木の下でキスをすると永遠に結ばれるつて噂」

そう言つて公園内にある大きな桜の木を指差す夏奈子。

「知つてるが、それがどうした？」

「試してみない？」

「えつ？」

私は目が点になつた。

「同性がキスをしたらどうなるか試すのよ」

伝説が真実だとして、同性がキスをしたらどうなるんだろうか。

「それ、興味あるな」

興味津々な私はそう答えた。

「じゃあやつてみようよ」

言つて夏奈子は私の手を掴み、桜の木の下まで駆けた。

「本当にやるのか？」

「当然でしょ。私たち付き合つてんだから、キスぐらいしなくちやね」

私はゴクリと唾を飲み込んだ。そしてゆっくり、夏奈子の唇に自分の唇を近付け、重ねた。

その瞬間、光りに包まれたのと同時に私の体に異変が起きた。何と、股間から何かが生えてきたのだ。

私は慌てて接吻を止め、後ろを向いて股間に手を当てた。生えていた。男にしか無い息子と言つ奴が。

「どうしたの？」

私が体の異変に驚いていると、夏奈子が心配そうな顔で私を見つめてきた。

「有紀雄？」

「え、有紀雄？ 有紀雄は私の弟だが。

「一寸待つて。私は有紀檸だ。恋人の名前間違えないで欲しいな」

「何言つてんのよ。あんた、頭大丈夫?」

「私は女で有紀檸と言つ名だ。有紀雄じや男だる」

「そう言つと夏奈子に可哀想な者を見る目で見つめられた。

「あんた、何か悪い物でも食べた?そこににあるトイレで鏡見てきなさいよ」

私は辺りを見回し、男女共用の公衆トイレを見付けるとそこには駆け込んで鏡を覗いた。

鏡に写つたのは、有紀雄の姿だつた。

どういう事だこれは?

私はトイレを飛び出して桜の木の下に戻り、荷物を手にすると入り口に向かつて駆け出した。

「有紀雄!」

「悪い、確かめたい事があるんだ!」

そう言つて公園を出た後、私は自宅まで猛ダッシュした。

「ただいま!」

家に上がり、そう言つ。

すると洗面所から「おかえり」と言つ声が返つてきて全裸の女が姿を現した。

私だつた。

「あ、姉貴・・・?」

「どうした?」

「服・・・着てくれないか?」

「何だ。お前、そんな事氣にして顔赤くしてんのか。きょうだい姉弟なんだから気にする事無いぞ」

「そうだ。私は家の中ではいつもこうだつた。

「俺、男だぜ?全裸で居られると襲つちまうぞ」

「ああ、大丈夫だ。もし襲つてきたら問答無用で打つ殺すからな」

「そんな物騒事を言つうのも私だ。

「所で、夏奈子ちゃんとのデートはどうだったんだ?」

「最悪だ」

「何か遭ったのか？」

「ああ。帰りに恋愛公園で伝説を確かめたんだ。そしたら女から男になつちました」

何を言つてるんだ私は？夏奈子の記憶には私では無く有紀雄として刻まれていたんだ。目の前に居る私が信じる訳が無いのに。

「姉貴・・・なのか？」

目の前の私がそう訊ねた。

「お前、有紀雄か？」

「ただけど。つーかどうなつてんだよこれ？風呂に入つてたらいきなり姉貴の体になつちましたんだ。ま、それなりに楽しめたけどな」

「お前・・・私の体で弄んでんじゃねえよ！」

私は目の前の私に思いつ切り殴り掛かつた。

しかし、目の前の私はひらりと身をかわした。

バカな。スピードには自信有ったのに。

「今の俺、姉貴だから動体視力と身体能力が有紀雄の時より飛躍的に上がってるんだ」

「絶対殴つてやる」

言つて私は再び殴り掛かるが、またもや避けられて空振りに終わる。

「糞！」

私は癖で胸倉を掴もうとしたが、服が無かつた。

「姉貴、これはこの前のおかえしな」

ガスン！

私は顔面を思いつ切り殴られた。

ショックで鼻血が垂れる。

「お前の体だぞこれ」

「関係無え」

ガスン！

再び殴られた。

「やめてくれ有紀雄」

「じゃあ謝つてくれないか？俺を殴つた事」

「あれはお前が殴られる様な事するからだろ」

「不可抗力だろ」

ガスン！

殴られた。

「えいっ」

私は有紀雄の股間を蹴つてやつた。

しまつた。女は平気なんだ。と言う事は・・・。

私はこれから起こる事を想像して冷や汗を搔いた。

「そうだ。この際、姉貴にも男にしか味わえない苦痛つてもんを教えてやるよ」

言つて有紀雄が私の股間を蹴つた。

「うつ！」

私はあまりの痛みに呻き声を上げて股間を押された。

「痛いか？俺がいつも姉貴にやられて味わつてた痛みだ」

「お前、元に戻つたら覚えとけよ」

そう捨てゼリフを吐いて部屋に行こつとしたが、あまりにも痛くて動けなかつた。

「この痛みは何時静まるんだ？」

「5分から10分くらい。長いと30分くらい痛みが残る」

「マジかよ・・・」

「姉貴が悪いんだからな」

「ごめんなさい、もうしません」

嘘だが。

「目が笑つてるぞ」

「・・・・・」

返す言葉が見付からない。

「あ、そうだ。先刻、剛田つて人から姉貴宛てに電話が来たぜ。何でも、今夜リベンジするとか何とかつて言つてたけど、何の話し？」

「何て返事したんだ？」

「何だか分からないから取り敢えずOK出した」

「バカ。お前、それ喧嘩のリベンジだ」

「マジかよ。どうすりゃ良いんだ？」

「行つてこい。そんで死ね」

「俺が死んだら姉貴、元に戻れないじゃん」

「それは嫌だ。けど受けてしまった以上、行かざるを得ない」

「解つたよ。行つてくる」

「ああ、気を付けろよ。それと服着とけ」

「服？ああ。それ着て良いか？」

「そう言つて指を差したのは、私が買つてきた服だった。

「駄目だこれは」

「けどそれ、姉貴が着るんだろ？だつたら俺が姉貴として着ても同じじゃないか」

「・・・しようがねえな。勝手に着ろ」

言つて私は階段を上つて行く。

「痛みは大丈夫なのか？」

「ああ、もう落ち着いてる」

「どうか」

有紀雄はそう言つて服を取り出した。

「あ、一寸待つた！」

私は階段を駆け降りて袋の中から夏奈子が欲しがつてたパンツを取り出した。

「パンダ？」

とよく改めて腹を押さえて笑い出す有紀雄。

「お前勘違いしてるから教えとくけど、これは夏奈子にあげる物だ」

「あれ、姉貴が穿くんじゃねえの？」

「私はスパツ派だ」

「ふうん。じゃあこれを穿けば良いんだな？」

言つてスパツを取り出す有紀雄。

「つーか、何だこれ？男物じゃん。しかも巷で不良が着てる様なもんだぞ」

「お前もそう思うのか」

「夏奈子ちゃんにも言われたのか？」

私は「クリと頷いた。

「姉貴らしくて良いけどな」

「フォローになつてないからな、お前」

「そうだな。それより姉貴、ブラは買ってねえの？」

「要らねえからな」

「確かに、姉貴は俎板だもんな」

「グサツ！」

心に一本目の矢が突き刺さつた。

「悪い、気にしてたか？俎板

「グサツ！」

また刺さつた。

「お前、これ以上言づな」

「俎板をか？」

「グサグサツ！」

二本の矢が同時に刺さつた。

「凄えな、俎板」

完全に落ち込んだ私はリビングに入つて隅で小さくなつた。

「どうせ私は俎板さ。幾ら栄養取つても出ないんだ」

「姉貴の場合、全部攻撃力に行くからな。じゃあ俺、もう行くな」  
有紀雄はそう言つて服を着ると家を出ていった。

それから一時間程経つた頃、有紀雄が帰つてきた。  
私は直ぐ様玄関へ向かつた。

そこにはボロボロになつた私の姿が在つた。

「なつ、どうしたんだよそれ！？」

「敗けた。まさか10人で来るとは思わなかつた」

「お前、ヘタレな」

「そう言つ姉貴は勝てるのかよ?」

「私は何十人掛かつて来ようが返り打ちに出来る」

「凄え・・・な・・・」

その言葉を最後に、有紀雄は意識を失つて倒れた。  
私は有紀雄を抱えて自分の部屋に運び、ベッドに寝かせて有紀雄の部屋に移動した。

「散らかってるな、有紀雄の部屋」

私は思わずそう口にした。

「掃除でもするかな」

掃除用具を用意して掃除を開始した。

「ん?」

掃除をしていると、ベッドの下にエロ本を発見した。

私はキヨロキヨロと辺りを見回してからエロ本に目を下ろした。  
パラパラとページを捲つて一通り見る。

何だこれは。息子の様子が変だ。

「姉貴、勃つたの?」

いつの間にか側に居た有紀雄がそう訊ねた。

「うわっ!」

私は慌ててエロ本をベッドの下に戻して有紀雄の方を向いた。

「そりやまあ、健全な男の子の体だからな」

「あのお、隠したんだから答えるのもどうかと思うぞ

「てかお前、寝てた筈だろ。何でこんな所に」

「目が覚めたんだ。そしたら俺の部屋から『うわっ』とか『うはっ』とか聞こえたから来てみたら姉貴が楽しそうにエロ本見てたんだ。  
近付いて声掛けても気付かねえぐらい集中してたぞ」

「マジかよ」

「中身が女でも男の本能には逆らえないか」

「みたいだな。つーか、お前の部屋汚いからな」

「五月蠅えな。良いんだよ」

「否、良くない」

言つて私は掃除を再開した。

そしてピカピカと光る程綺麗になつた所で、掃除を終わらせた。

「うおー、マイルームがあー！」

「悪いが今は私の部屋だ」

「こうなつたら姉貴の部屋を汚してやるー。」

言つて有紀雄は部屋を出て行つた。

一人残された私は、掃除用具を片付け、ベッドの下からエロ本を取り出して閲覧再開。どうやら墳つてしまつたらしい。

「・・・・・」

何か物足りない。今度、夏奈子に裸を見せて貰うか。

そう思うと私はエロ本を仕舞つてベッドに横になつた。

## Story 2・変態への道（前書き）

15禁なのでこれが限界なのですう。

## Story 2・変態への道

「姉貴、起きる」

その声と共に体を揺さぶられた私は目を覚ました。  
そして最初に見たのは、私の姿だった。

「戻つてないのか」

「その前に飯だ」

「そんなの作つてる時間無えよ

私は時計を見た。

時刻は8時45分。ヤバい時間である事は間違ひ無い。  
私は慌ててベッドから出て着替えを済ませた。

「有紀雄、モタモタしてねえで行くぞ」

鞄を取り、部屋を出て階段を降りる。  
靴を履き、ドアを開ける。

「有紀雄！」

叫ぶと支度を終えた有紀雄が降りてきた。

「お前、Yシャツは中に入れろ」

「嫌だよそんなの」

「格好悪いからな、お前」

「解つたよ」

言つて渋々Yシャツをスカートの中に入れる有紀雄。

「これで良いか？」

「ああ。あと急げ」

有紀雄が靴を履き、外に出る。  
私はドアを閉めて鍵を掛けた。

「ダッショ！」

言つて学校まで駆ける。

「するいぞ姉貴！」

有紀雄が慌てて後を追つて來た。

「遅えな、姉貴」

「悪かつたな」

「先行つてゐるな」

「そう言つて一足先に駆けて行つた。

何かもう面倒だな。

私は走るのを辞めて歩き出した。

駅に着き、定期を出して改札を通り、ホームに出て電車を待つ。

「有紀雄」

と声が聞こえて右肩を叩かれた。

振り向くと夏奈子が居た。

「夏奈子、何で？」

「元カレに聞いたのよ」

「ああ、そうか。こいつ、新一と付き合つてたんだっけ。あれは気の毒だつたな。

「ごめんな。俺の所為で別れる事になつて」

「何で謝るのよ？」

「え、だつてほら。昨日、廊下で」

「ああ。あんたが飛び出してきて私にキスした時か。そんなの別に気にしてないからさ。それに、こいつてあいつなんかより格好良い彼氏ゲット出来たんだもん。感謝してるわ」

「否、あれは新一を狙つてやつただけで、こいつとキスしたのは不可抗力だ。

「それより知つてる? 新一の奴、もう新しい彼女作つたのよ

「マジで?」

「うん。お相手は隣のクラスに居る不良だつて。全く、あんなの何処が良いんだか

「私だつた。

「有紀雄の奴、私の体返せ。

「夏奈子、その不良、俺の姉貴だから」

「マジ?」「めん、知らなかつた」

「良いよ、別に。事実だから。それより、放課後時間有るか?渡したい物があるんだけど」

「放課後に渡したい物。何だかドキドキするわ」

そんな事を話していると、電車がホームに進入してきた。私たちは電車に乗り込み、座席に座つた。ドアが閉まつて発車する。

「・・・・・」

話題が見付からない。取り敢えず適当に話し掛けでみるか。

「「あのさ」」

一人同時に声を掛けた。

「夏奈子から言つてくれ」

「そう。じゃあ言つね。今日さ、私ん家に来ない?」

夏奈子からのこきなりのお誘い。これは行くべきだ。

「行つて良いの?」

「うん。有紀雄に来て欲しいんだ」

「ああ、じゃあ遠慮無く」

「じゃあ学校終わつたら真つ直ぐ家ね」

「うん。じゃあ放課後じやなくて家行つてから渡すよ」

と言つて間の時間をすつ飛ばして夕方。

私は夏奈子の家の夏奈子の部屋に居た。

「で、渡したい物つて?」

「ああ、これなんだけど」

そう言つて包装紙に包まれた物を渡した。

これは昨日、私がたれパンダのパンツを自宅で包装した物だ。

「開けて良い?」

「ああ」

夏奈子は包装紙を綺麗に開けた。

「なつ!?」

刹那、夏奈子の頬が真つ赤になつた。

「お前が昨日、服屋で欲しがってたパンツだ」「・・・バカ！」

夏奈子の投げたパンツが私の顔を覆う。

私はパンツを退かした。

「要らないつて言つたでしょ！？」

「え、でも思いつ切り欲しがつてたじやん」

「・・・あ、有り難う」

言つて申し訳無さそうにパンツを取る夏奈子。

「だ、大事にするね」

「ああ」

「て言つたか、彼氏に最初にプレゼントされた物がパンツってのもねえ

「嫌なら返して来るが？」

「そんな事無いわよ」

言つてそのパンツをタンスに仕舞う夏奈子。

「そうだ、忘れてた。」

「夏奈子、はだ・・・」

やめとこう。人間としてこれはどうかと思つ。

「肌？」

「何でも無い」

「最後まで言ひなさいよ」

「え、じゃあ言つよ。お前の裸を見せてくれ」

「ピシッ！」

夏奈子のビンタが私の頬に放たれた。

「痛！」

「最つ低！」

「最低なもんか。健全な男の子なら普通の事だぞ」「エロ本で済ませなさい！」

「エロ本じゃ物足りないんだ」

何を言つてるんだ私は。

## 「変態」

「全くその通りだ。って、認めてるし。

「ま、まあ、そんなに見たいんなら、一寸だけなら見せても良いけど…」

「マジで！？ ラッキー！ って、何考えてんだ私は！？」

「良い？ ホントに一寸だけだからね？」

「そう言つて服を脱ぎ始める夏奈子。

此奴、マジで見せる気だ。つーか、やべえ。興奮して勃つてるし。ブレーキブレーキ。

「あのや、やっぱ今度で良いよ」

私はそう言つたが、時既に遅し。夏奈子は全裸になつていた。

「もう脱いじやつたわよ！」

「そつ・・・みたいだね」

私は苦笑した。

「どうお？ 満足した？」

「どうだろ？。

「もう少し見せてくれ」

「うわ、変態だ私。

「わ、解つた。もう少し・・・否、有紀雄が納得行くまで・・・

「マジ？ だつたら丸一日」のままで居てくれ

「うわ、最低だ。下の下だ。」

「そ、それは・・・否、彼氏の頼みだ。貫き通すわよ！..」  
変な所に火が点いてしまつた。

ガチャ

ドアが開いて男の子が入つてきた。

「うわっ、姉ちゃん何やつてんの？」

ドーンっと効果音を鳴らして床に手を着く夏奈子。

「春樹、何も見なかつた事にして出て行つてくれ・・・」

「もう見ちゃつたよ」

「出て行け！」

「な、何か分かんないけど兄ちゃんもやるね。姉ちゃんを裸にするなんて」

「否、俺は何もしてないよ。此奴が勝手に脱いだんだ。パンツを買つてくれたお礼だつて言つて」

「うわあ、姉ちゃんそつ言つ趣味有つたの?」

「消える。今直ぐ消える!」

夏奈子が立ち上がり、春樹を蹴つて追い出し、ドアを閉めた。その隙に私は夏奈子の洋服を隠した。全裸をじつへり堪能する為に。

「有紀雄、私の服何処へやつたの?」

「知らねえな」

「無えなうしじょうがねえな。」のまま居るしか無い

「嫌よ!」

「無えなうしじょうがねえな。」のまま居るしか無い

私がそつ言つと、夏奈子はペタんと座り込んだ。

「あんたは私を使って何がしたいのよ?」

「フラストレーションの解消」

「変態だ・・・」

「その変態の言つ事を聞いて本当に裸になつてゐる時点でお前も十分変態だからな」

「有紀雄、別れよう」

「ちよつ、お前本気で言つてんのか?自分から付き合つてくれつて言つておいてそれは無いだろ」

「・・・・・・」

夏奈子は反論出来なかつた。

「・・・・悪かったよ。返す」

言つて私は服を取り出して返した。

夏奈子は服を着ながら言つ。

「やっぱあんたが隠してたのね」

「ああ。お前の裸をたっぷり堪能する為にな

「変態だあ！」

面白かったので私は笑った。

「何が可笑しいのよ！？」

「否、何でも無いよ。じゃあ、俺はもう帰るね

「え、帰っちゃうの？もう少し居てよ」

「裸になってくれるか？」

「帰れ」

「はいはい、帰りますよ」

言つて私は鞄を持つて夏奈子の家を跡にした。

それにしても夏奈子を弄るの楽しかったな。今度は何せよ。う。この時、私は未だ気付いていなかつた。自分が変態の道を歩みつ

つある事に。

To be continued . . .

### Story 3・男になりました・裏！（前書き）

これはStory 1の裏側で起きていた出来事です。有紀雄視点になつていますので一度美味しい筈です。

## Story 3・男になりました・裏！

俺の名は澤田 有紀雄。今は訳有つて姉の有紀檸の体になつている。

その俺に最近、彼女・・・では無く、彼氏が出来た。お相手は姉貴が惚れた黒田 新一だ。

ある日の放課後、夏奈子ちゃんと話をする事に失敗した俺は、屋上へとやつて来た。

すると、転落防止用のフェンスを越えた先の縁に、新一が立っていた。

「待て黒田！早まるな！」

俺は新一の下まで駆けた。

「黒田、何か遭つたなんなら話してみる」

「聞いてくれるのか？澤田」

「ああ」

俺が頷くと、新一はフェンスを越えた。

「実はな、夏奈子にレズの傾向が有つたんだ

「否、あればバイだな。」

「でさ、僕、振つちまつたんだよ」

「それで何で自殺に繋がるんだ？」

「ショックだつたからに決まつてるだろ！まあ、その事より、仲直りする方法解らないか？」

「多分無理だな。新しい恋人作れ

「ああ、俺が姉貴だつたらなあ・・・。

「新しい恋人？」

「ああ、そうだ。まあ、取り敢えず今日の所は帰ろつ。お前の新しい彼女作りは明日から始めような

「ああ

「そうして一緒に帰る事にした。

「あれ？」

俺は学校から駅までの途中にある恋愛公園の桜の木の下で夏奈子ちゃんとキスをしている姉貴を見付けた。

「どうしたの？」

と新一が俺の顔見て視線を確認すると、姉貴たちの方を見た。

「やべえなあれ

「見るな

見たらまたショックを受けるだろ?と思つた俺は慌てて彼の顔を覆つた。

やべ、こっち見た!

俺は新一の顔を覆つたままその場を去つた。

そしてそのまま駅まで来てしまつた。

「お前も早く帰れよ」

俺は新一を解放すると、そう言ひて駅構内へと入つて行つた。

自宅に帰つた俺は、風呂に入つていた。

すると突然、俺の息子が中に引っ込み、髪の毛が背中まで伸びてくると言つ有り得ない異変が起きた。

俺はシャワーを止め、ドアを開けて風呂から出で田の前にある洗面台の鏡を覗き込んだ。

そこに写つているのは、姉貴の姿だった。

「何で?」

俺は自分の体を改める。

どう見ても姉貴だつた。

「ただいま!」

と俺の声が玄関から響いた。まさか。

俺は慌てて体を拭き、平然を裝つて「おかえり」と廊下に出た。

予想的中。玄関に突つ立つて いるのは、正しく俺だつた。

「あ、姉貴……？」

此奴、中身は俺か。なら姉貴を装おう。

「どうした？」

目の前の俺は顔を真つ赤に染めながら答える。

「服……着てくれないか？」

「何だ。お前、そんな事気にして顔赤くしてんのか。姉弟なんだから気にする事無いぞ」

「俺、男だぜ？全裸で居られると襲つちまうぞ」

「ああ、大丈夫だ。もし襲つてきたら問答無用で打つ殺すからな。所で、夏奈子ちゃんとのデートはどうだつたんだ？」

つて、何訊いてんだよ俺！？此奴が姉貴と未だ決まつた訳じゃねえじゃん！

「最悪だ」

「何が最悪なのか。

「何か遭つたのか？」

「ああ。帰りに恋愛公園で伝説を確かめたんだ。そしたら女から男になつちまつた」

此奴、姉貴か？

「姉貴……なのかな？」

「お前、有紀雄か？」

「そうだけど。つーかどうなつてんだよこれ？風呂に入つてたらいきなり姉貴の体になつちまつたんだ。ま、それなりに楽しめたけどな」

その瞬間、姉貴がキレた。

「お前……私の体で弄んでんじやねえよ！」

姉貴がいきなり襲い掛かってきた。

俺はひらりと身をかわした。

「今の俺、姉貴だから動体視力と身体能力が有紀雄の時より飛躍的に上がつてるんだ」

「絶対殴つてやる」

姉貴が再び殴り掛かつてきた。  
俺はひらりと身をかわす。

「糞！」

姉貴は俺の胸倉に手を伸ばしたが、服が無かつた為に失敗に終わった。

「姉貴、これはこの前のお返しな」

言つて俺は田の前に居る俺の姿をした姉貴の顔面を殴つた。  
ガスンッと言つ音と共に鼻から血が垂れる。

「これお前の体だぞ」

「関係無え」

もう一発殴つた。

ガスン！

「やめてくれ有紀雄」

「じゃあ謝つてくれないか？俺を殴つた事」

「あれはお前が殴られる様な事をするからだろ」

「不可抗力だろ」

言つて俺は三度目のパンチをお見舞いした。

「えいっ」

姉貴が俺の股間を蹴つてきた。

屹度今頃、蹴つた事を後悔しているだろう。その証拠に大量の冷  
や汗。

「そうだ。この際、姉貴にも男にしか味わえない苦痛つてもんを教  
えてやるよ」

言つて俺は仕返しに姉貴の股間を蹴つてやつた。

「うつ！」

激痛に呻き声を上げて股間を押さえる姉貴。とても痛しそうだ。

「痛いか？俺がいつも姉貴にやられて味わつてた痛みだ」

「お前、元に戻つたら覚えとけよ」

姉貴はそれを捨てゼリフにして去ろうとしたが、あまりにも痛く

て動けなかつた。

「この痛みは何時静まるんだ？」

「5分から10分くらい。長いと30分くらい痛みが残る」

「マジ・・・・？」

「姉貴が悪いんだからな」

「ごめんなさい、もうしません」

と姉貴は心を込めて謝るが、目だけは笑っていた。

「目が笑ってるぞ」

そう言つてやると、姉貴は言葉が詰まつた。

「あ、そうだ」

俺は風呂に入る前に電話を受けていた事を思い出した。

「先刻、剛田つて人から姉貴宛てに電話が来たぜ。何でも、今夜リベンジするとか何とかつて言つてたけど、何の話し？」

「何て返事したんだ？」

「何だか分からぬから取り敢えずOK出した」

「バカ。お前、それ喧嘩のリベンジだ」

「マジかよ。どうすりゃ良いんだ？」

「行つてこい。そんで死ね」

「俺が死んだら姉貴、元に戻れないじゃん」

「それは嫌だ。けど受けてしまった以上、行かざるを得ない」

「解つたよ。行つてくる」

「ああ、気を付けるよ。それと服着とけ」

「服？ ああ。それ着て良いか？」

そう言つて俺は、姉貴が買つて来たと思われる洋服の入つた紙袋を指差した。

「駄目だこれは」

「だけどそれ、姉貴が着るんだろう？ だったら俺が姉貴として着ても同じじやねえか」

「・・・・・ しようがねえな。勝手に着ろ」

言つて姉貴は階段を上つて行く。

「痛みは大丈夫なのか？」

「ああ、もう落ち着いてる」

「そりゃ」

「そりゃうと俺は服を取り出した。

「あ、一寸待つた！」

姉貴が慌てて降りてきて袋の中からお尻にたれパンダの絵が描かれたパンツを取り出した。

「パンダ？」

俺はそのパンツをよく改めると、腹を押さえて笑い出した。

「お前勘違いしてるから教えとくけど、これは夏奈子に上げる物だ」

「あれ、姉貴が穿くんじゃねえの？」

「私はスパツ派だ」

「ふうん。じゃあこれを穿けば良いんだな？」

言つて俺はスパツを取り出した。

「つーか、何だこれ？男物じゃん。しかも巷で不良が着てる様なもんだぞ」

「お前もそりゃう思うのか？」

も、と言つ事は。

「夏奈子ちゃんにも言われたのか？」

姉貴は「ククリと頷いた。

「姉貴らしくて良いけどな」

「フォローになつてないからな、お前」

「そうだな。それより姉貴、ブラは買つてねえの？」

「要らねえからな」

俺はチラッと胸を見た。

「確かに、姉貴は俎板だもんな」

その一言で姉貴はショックを受けた。

「悪い、気にしてたか？俎板」

またショックを受けた。

「お前、これ以上言つな」

「俎板をか？」

すると姉貴は更に傷付いた。恐らく、次言つと完全に落ち込むだろう。

「凄えな、俎板」

その瞬間、姉貴は完全に落ち込み、リビングに入つて隅の方で小さくなつた。

「どうせ私は俎板さ。幾ら栄養取つても出ないんだ」

「姉貴の場合、全部攻撃力に行くからな」

もうやめとこう。可哀想だ。

「じゃあ俺、もう行くな」

言つて俺は服を着用し、家を出て待ち合わせの場所まで移動した。

「此處で良いんだよな？」

人気の無い河原に来ていた俺は辺りを見回した。  
橋の下に黒い人影が10人程見えた。

「マジかよ・・・」

俺は思わず呟いた。

すると、黒い人影が一斉にこちらへやつて来て攻撃を開始した。  
出し抜けに攻撃を食らつた俺は、あつという間にボロボロになり、  
その場に倒れた。

「何だ此奴。本当に澤田か？」

「呆気なかつたな」

「案外、替え玉だつたりしてな」

「俺たちに勝てないと見込んで自分は逃げたつてか。傑作だな」  
そう言いながら、軍勢は去つて行つた。

直後、偶々散歩をしていた新一が偶々通り掛かり、偶然俺に気付いて俺の下にやつて來た。

「君、大丈夫？」

大丈夫じゃない。

そう言いたかったが、喉から先に出せない。

「意識は有るみたいだね。立てる?」

俺は徐に起き上がる。途中で脱力してしまった。

新一は俺の下に手を入れると、俺の体を起こした。

「一体何が遭つたの?」

集団リンチ。

そう言おうと思つたが、やはり声が出なかつた。

「まあ良いや。僕ん家来て。手当してあげる」

黒田、お前は良い奴だ。見直した。俺が女なら惚れてる所だ。つて、今女だった。

そんな事を考へていると、俺の心臓が高鳴りだした。

俺はこれが何なのか直ぐに解つた。

どうやら、俺は此奴に惚れてしまつたらしい。女として。

「乗つて」

新一はそう言つて、背中を俺に向ける。

俺は遠慮無くその背中にしがみついた。

「ふんっ」

新一はすつと立ち上がる。

「重・・・」

今、姉貴なら叩くだろうな。

ポカッ!

俺は無意識に新一の頭を叩いていた。

「いてつ! 何か用?」

その問いに俺は笑みを浮かべた。

「? ? ?」

新一は頭にハテナを二つ浮かべて歩き出した。

「僕、黒田 新一って言つんだ。君は?」

「あー」

俺は発声が可能だと言つ事を確認すると、姉貴の名前を言つた。

「澤田 有紀檸」

「へえ、君があの澤田 有紀檸」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、有名だからね。巷じゃ知らない人は居ないよ」

「何で有名なの？」

「噂になつてるんだよ。夜な夜な町を徘徊して不良達に喧嘩売つてボコボコする伝説の不良女子高生つて」

そんな伝説作るなよ、姉貴。

「着いたよ」

言つて新一が、表札に黒田と書かれた一軒家の前で止まつた。

「ただいまー」

とドアを開けて中に入る新一。

すると奥から三十路を少し越えた感じの女性が出て來た。

「おか・・・つて、その娘何！？」

「河原で倒れてるのを見付けたんだ。手当してあげてよ」

「わ、解つたわ」

言つて女性が新一から俺を受け取る。

「つて、この娘、澤田くんのお姉さんじゃないのよー。」

「え？」

「有紀檸ちゃんよね？」

その問いに俺は頷いた。

「あなた、また喧嘩でもしたの？」

俺は首を横に振り、集団リンチに遭つた事を女性に伝えた。

女性は顰めつ面になつて俺をリビングまで運び、食卓の椅子に座らせた。

「一寸待つててね」

そう言つと、女性は薬箱を取りに行つた。

「あの、有紀雄くんのお姉さん」

「有紀檸で良いよ」

「じゃあ、有紀檸さん」

「あ？」

「有紀檸さんって、付き合ってる人とかって居ますか？」

「お前は初対面の女性にそんな事訊いてどうしたいんだ？」

俺は新一の問いにそう問い返した。

「初対面じゃいけないんですか？」

「否、別にそんな事言つてねえけど」

此奴、姉貴の姿に惚れたな。

新一は安堵の溜め息を吐いて「良かった」と呟いた。

「あの、初対面の方にこんな事言つのも失礼だとは思うんですけど、僕の彼女になつてくれませんか？」

「いきなりかよ！？普通友達とかからじゃねえ！？まあ、これは姉貴が望んでる事だし、OKしといてやるか。

「断る理由は無えな」

「そ、それじゃあ！」

俺は「ああ」と頷いた。

「何か盛り上がつてるみたいね」

俺が新一との交際を受け入れた所で女性がやつて來た。

「一寸沁みるかも知れないけど、我慢して頂戴ね」

そう言つて消毒液を俺の傷に吹き付ける。

「んつ！」

案の定、俺の怪我は沁みた。

女性は全ての傷をバンドエイドで塞ぎ、俺の膝を軽く叩いた。

「はい、お終い」

「あざーっす」

「良いのよ、このぐらー」

そう言つと、女性は薬箱を片付けに行つた。

「なあ、黒田」

「新一で」

「じゃあ新一」

「はい？」

俺は新一の後に手を回して抱き寄せ、自分の唇を彼の唇に重ね

た。

「んっ・・・ふはっ！」

唇を離して新一の顔を見詰める。

何やつてるんだ、俺は。

「ファーストキス、頂きました」

ついでに何言つてるんだ、俺は。

新一は頬を赤くして固まつた。

「じゃ、帰るな」

そう言つて俺は、覚束無い足取りで玄関まで行き、靴を履いて外に出た。

そしてドアをソッと閉めて自宅まで歩き出した。自宅に着くと、俺は静に上がり込んだ。

すると、気配を感じたのか、姉貴が姿を現した。

「なっ、どうしたんだよそれ！？」

「敗けた。まさか10人で来るとは思わなかつた」

「お前、ヘタレな」

「そう言つ姉貴は勝てるのかよ？」

「私は何十人掛かつて来ようが返り討ちに出来る」

「凄え・・・な・・・」

あれ？ 何か、意識が・・・。

気が付くと、俺は姉貴の部屋のベッドの上に横になつていた。隣の部屋からは時折、「うはっ」とか「うほっ」とか妙な声が聞こえてくる。

気になつた俺は、興味本位で隣の部屋に移動した。すると、姉貴が楽しそうにエロ本を見ていた。しかも勃つてしまつている様だ。

「姉貴、勃つたの？」

エロ本に熱中していた姉貴は、俺の声に「うわっ！」と驚いて慌

ててエロ本をベッドの下に隠した。

「そりやまあ、健全な男の子の体だからな」

「あのせり、隠したんだから答えるのもどつかと思ひつけ

「てかお前、寝てた筈だろ。何でこんな所に」

「目が覚めたんだ。そしたら俺の部屋から『つまつ』とか『うはつ』とか聞こえたから来てみたら姉貴が楽しそうにエロ本見てたんだ。

近付いて声掛けても気付かねえぐら集中してたぞ」

「マジかよ」

「中身が女でも男の本能には逆らえないか」

「みたいだな。つーか、お前の部屋汚いからな」

「五月蠅えな。良いんだよ」

「否、良くない」

そう言つて姉貴は部屋の掃除を始めた。

見る見るうちにピカピカになつていぐ俺の部屋。

「つーか、マイルームがあー！」

「悪いが今は私の部屋だ」

「いつなつたら姉貴の部屋を汚してやるー！」

俺はそう捨てゼリフを吐いて姉貴の部屋に移動し、そのままベッドに突っ伏した。

## Story 4・日曜の危ないデート

日曜、午前8時。

空腹で目を覚ました私はベッドから出てカーテンを開けた。  
空は雲一つ無い快晴。

飯食つて夏奈子ん家に行つて弄ぶか。

私は部屋を出て階段を降り、キッチンに移動して朝食のしたくを始めた。

「つて、何を作ろう?」

そこへ有紀雄がやつて来てリクエストをする。

「俺、炒飯食いてえ」

「炒飯だな・・・つて、何で居るんだよ?」

「腹減つたからだよ」

「バ力。飯なんか食つてる暇あるか。お前は私なんだ」

「だから何だよ?」

「バイトに行け。日曜はバイトの日なんだ」

「え?」

「9時からだからな。今から走れば間に合ひだら」

「で、でも腹が・・・」

「食つてる暇なんか無いと言つた筈だ。解つたらひとつと行け」

「ちえ。で、何処だよ?」

「駅前の喫茶店だ」

「そうか。行つてくる」

言つて有紀雄は出て行つた。

「炒飯食おう」

私は有紀雄のリクエストした物を作り、食卓に運んで食べた。

ピンポン

半分くらい食べた所で家のチャイムが鳴つた。

私は食事を中断して玄関に行つてドアを開けた。

その先に居たのは私の彼女だった。

「暇だから来ちゃった」

夏奈子は笑みを浮かべて家に上がり込んだ。

「俺は未だ良いなんて言ってない。住居不法侵入罪で警察に連れてくぞ」

「そんな事したら殺すわよ?」

と睨み付ける夏奈子。

「冗談だ」

「そう。あら、良い匂いね。炒飯?」

「よく解つたな。大正解だ」

「誰が作ったの?」

「俺」

「え、あんたが!? あんた、ご飯作れたの!?」

「疑つてんの? 何だつて作れるぞ」

「そう。じゃあさ、今度私ん家来て作つてよ。家でご飯作れるの春樹だけなのよね」

「親は?」

「早朝から仕事」

「良いじやん。弟に作らせとけば」

「駄目よ。可哀想だもん」

言つて涙を零す夏奈子。何か事情があると見た。  
「解つた。作りに行く。所で飯は食つたのか?」

「未だ」

「何か食べるか?」

「良いわよ、別に」

言つて頬を赤くする夏奈子。しかし。

「グウ」

夏奈子の腹の虫が鳴いた。

「・・・食べる」

「何が良い?」

「何でも良いわ」

そう言つてリビングに入る夏奈子。

「あ、これ食べて良い？」

夏奈子は私の食べ掛けの炒飯を見るとそう言つた。

「それ俺の食べ掛けだぞ」

「知らないわよそんなの。食べて良いよね？」

私は暫し考えたが、結局折れる事にした。

「良いよ」

「有り難う」

そう言つて椅子に座り、私の食べ掛けを口にする。

「美味しい。ホントにあんたが？」

「疑り深いな、お前」

「ホントにあんたが作つたなら凄いわよ。あんた、調理実習の時ケーキを思いつ切り焦がしてたしね」

有紀雄だ。

「あ、あん時はどうかしてたんだよ、屹度」

「はーん？あんた、5回もやり直してたじじゃない。あれで偶々だつて言えるの？」

と夏奈子が可哀想な者を見る目で見た。

「あ、あれは態とだ。お前の氣を惹く為の

「あんた、バカじやないの？」

墓穴を掘つた私はドーンッと音を立てて両手を床に着いた。

確かに夏奈子の言つ通りだ。あんな事で女子の目を惹く事なんて出来ない。

「まあ、ある意味引いたけどね」

「引かれちゃ意味無えよ」

「そうね。『馳走様』

食べ終わつた夏奈子がスプーンを置く。

「ああ、私の炒飯が・・・カムバツク、私の炒飯！」

「つかさ、何しに来たんだ？」

私は立ち上がり様に訊いた。

「先刻言つたじゃない。暇だから来たつて」

「じゃあさ、何処か行かねえか？休みの日は一日中、ゴロゴロするつ

てのもあれだろ」

「あなたがそうしたいなら付き合つても良いけど、何処へ行くの？」

「・・・・・」

「何も考えてなかつた。

「何も考えてないの？」

私は頷いた。

「じゃあ映画行かない？」

「映画？」

「私ね、見たい映画があるの。一緒に行こいつよ？」

「ああ。良いけど

「じゃあ決まり。仕度してきて頃戴」

「はいはい」

私は部屋に行き、デートに最適な服を選んで着替え、玄関に来た。

「遅い」

「しそうがねえだろ。服選んでたんだから」

「ふうん。まあ良いわ。行くわよ」

言つて先に家を出て行く夏奈子。

私は靴を履いて家を出ると、ドアに鍵を掛けた。

「場所は何処なの？」

「駅前のシネマビル。そんな事より早く行こうよ」

そう言つて私の手を掴んで歩き出す夏奈子。

駅前に来ると、夏奈子は迷う事無く田的の建物へと入つて行く。

「あれを一枚お願ひします」

夏奈子は窓口スタッフの後ろにある『「ひりときめき高校』と書く物を指差した。

名前から察するに恋愛物だつ。

「一般の方でしづうか？一人で3・600円になります」

夏奈子は私の脇腹を小突きながら生徒手帳を出した。

私はポケットから生徒手帳を取り出す。

「失礼致しました。3,000円になります」

夏奈子がまた脇腹を小突く。私に払え、と言つのだらうか。

私は仕方なく財布を取り出し、中から千円札を三枚出して窓口に置いた。

「自由席になつておりますので、お好きな席をお選び下さい」  
言いながらお金をレジに仕舞い、チケット一枚と交換する。

私はそれを取り、一枚を夏奈子に渡した。

「上映まで一時間はあるわね。何処かでお茶でもしましょ？」

「そうだな」

私たちは一旦建物を出ると、向かい側の喫茶店に入った。

「いらっしゃい」

目の前の店員が固まつた。そして汗をタラタラ流す。  
その店員の正体は有紀雄だった。

「姉貴、何で固まんだ？」

「え、この人が有紀雄のお姉さん？」

夏奈子は元私をまじまじと見詰める。

「意外と可愛い顔してるのね」

私はその言葉に赤くなつてしまつた。  
褒められてるのは有紀雄なのに何故。

「つーか、この人固まってるわよ」

「ああ、それは多分俺たちと鉢合せしたからだ。おい、固まつてねえで働け」

私は目の前で固まつてゐる有紀雄の胸を突いた。

「うわあっ！」

有紀雄が反射的に私を突き飛ばした。

その勢いで私は尻餅を着いた。

「痛！」

「有紀雄、大丈夫？」

「ああ、何とか」

「マスター！」

有紀雄が店長を呼ぶと、髪を生やしたハゲ頭が慌ててやつて來た。出たな、クロちゃん。

「有紀檸くん、どうかしたのかな？」

「この方が私の胸をいきなり触つたんですね！」

「脚色し過ぎだあ！お前が固まつてたから我に返らせてやつただけじゃないか！」

「お客様、少しお話しを伺いましょうか」

言つて店長が私を睨み付けた。嫌な予感がする。

店長は私の手を掴むと、Staff onlyと書かれた扉の向こうへ連れ込み、そしていきなり私を殴り付けた。

ガスン！

私は勢いで倒れてしまった。

「何すんだこのハゲ頭！」

「は・・・ハゲ頭だとお・・？」

神経を逆撫でされた店長が拳をポキポキ鳴らす。

「俺の一番気にしてる事を言いやがつたな！？貴様は生かしちゃおけねえ！」

店長の拳が一気に降ろされる。

私は慌てて寝返りを打つて間一髪攻撃をかわした。

そこへ丁度、有紀雄がやつて來た。

「グッズタイミング！お前、此奴を止めてくれ！」

「どうすれば良いんだよ？」

「やめて下さい店長、と後ろから抱き付くんだ。それで止まる」

「そんなキモイ事出来るか！」

「良いからやれ！私の命が懸かってんだ！」

「わ、解つたよ」

有紀雄は店長の背中に抱き付いた。

「やめて下さい店長！」

するところだらうか。店長は落ち着いて「はーい」と甘えた声で返事をした。

私は立ち上がり、有紀雄の耳元で囁いた。

「（こいつ、私にベタ惚れなんだよ。だから私の言つ事なら何でも聞いてくれるんだ）」

「（マジかよ！？）」

「（ああ、マジだ。それと多少の事は我慢してやつてくれ）」

「（多少の事？）」

「（胸触つたりケツ触つたりするセクハラ行為だ）」

その途端、有紀雄の顔が真っ赤になつた。

「（姉貴は良いのかよそれで）」

「（言うなりになるんだから安いもんだる）」

「（えつ、俺、先刻思いつ切り殴つちゃつたよ）」

「（なつ！？拙いだろそれ！ハゲ頭の中の私の株が下がつたりビツつすんだ！？）」

「（呪、殴られて嬉しそうな顔してたぞ此奴）」

「（うか。Mだったのか店長は。）

「お前、此奴を死なない程度に殴つとけ。ストレス発散には良いだろ？」「

「良いのかよ！？」

「だつて此奴、Mなんだろ？問題無じじゃん」

「ああ、適度にやるよ。つーか、夏奈子むちゅんビートか？」「ま、まあな

「頑張れよ」

言つて有紀雄は出て行つた。

「お前、有紀檸くんとはどう言つ関係だ？」

「一人つきりになつた途端、ハゲ頭がそう訊いてきた。  
知りたいか？なら教えてやる。俺のコレだ」

言つて私は拳を作つて小指を突き立てて見せた。

「つまーつ、失恋したー！」

店長は豪快に泣き出した。本当に私に惚れてたんだな。可哀想に思えた私は本当の事を言つてやる事にした。

「悪い、今のは嘘だ。本当は姉弟だ」

「えつ、そうなの？」

泣き止んだ店長が目を丸くして私を見る。

「何だ。だつたら最初からそう言つてくれれば良いじゃないか」

ガハハ、と笑いながら私の背中を強く叩く。

「弁解する前にあんたが此処に連れ込んで攻撃してきたんだろうがよ。つーか、痛えぞハゲ！」

と最後にハゲを強調しておく。

「ハゲ？」

ヤバイと思った。離れよう。

「じゃあ俺、デート中なんで失礼します」

そう言つて出て行こうとしたが、項を掴まれてしまつた。

「一寸待て」

「な、何ですか？」

私は冷や汗を搔いた。

ガスンツ、バキッ、ドカッ！

全てが終わり、私はボロボロの姿で倒れていた。

結局最後はこうなるのか・・・。

その後、何とか自力で夏奈子の下に戻り、一緒に映画を見た。

恋愛物では無くホラー映画だった。

放課後に主人公が好きな娘に告白しようと声を掛けたが、実はそいつはゾンビで主人公に襲い掛かると言つた内容だ。

凄く怖かった。

もう夏奈子と映画は見ない。そう心に決めた私だつた。

## Story 5・河原でテスマッチ メインは弟虐め（前書き）

この話は「Story 3・男になりました・裏！」のリベンジ戦に繋がる話と弟を姉が精神的にも肉体的にも虐める話です。

## Story 5・河原でデスマッチ メインは弟虐め

これから話すのは、私が未だ有紀雄になる前の事だ。  
時期的には、高校に入った頃の話だ。

当時、私はかなり荒れていた。

夜の町を徘徊しては誰かれ構わず一方的に暴力を振るう。そんな毎日だった。

ある日の夜。

無性に腹が立つていた私は、ストレスを発散しようと、町を徘徊していた。

「おい！」

偶々土手を通り掛かつた私は河原で数人の男が一人の男に対して暴行を加えているのを見掛けた。

私は近くまで駆け寄つて言つてやつた。

「てめえら、一人に対し大勢で掛かるとは卑怯じやねえか。男なら一対一でやれ。それとも、大勢で掛からないと勝てないのか？雑魚だな」

「何だ、てめえは？」

「女か。女に用は無えんだ。あつち行つてな」

「人がシッシッと虫を払う様な動作をした。

それにムカついた私は、その男の懷に駆けて鳩尾に拳を埋ずめていた。

「うつ！」

男は呻き声を上げ氣絶して倒れた。

「てめえ、よくもやりやがったな」

「ボーッと突つ立つっていたからな」

「クソッ、舐めやがつて！おい、殺つちまつ」「あー、待つた」

一人が言い掛けた所で私は手の平を前に出した。

「その前に救急車呼んで良いか？」

「ああ、 そうした方が良いだろ？」

私は携帯を出すと、 119番をした。

台数は倒れてる奴を含めて・・・10台だ。

「10台だよ！？巫座戯やがってえ！」

完全に舐めきられてると思い込んだ敵の一人が「打つ殺してやる！」と斬られ役の様なセリフを吐いて突っ込んできた。

私は相手の力量を測る為、 態と攻撃を受ける。

ガスン！

男の渾身の力を込めた一撃が私の頬に決まる。

私は攻撃を受け流す為、 態と倒れた。

「けつ、 口だけかよ」

男は私がもう起き上がらないと思つて背中を見せた。

私は咄嗟に立ち上がり男の背中に蹴りをくれてやる。

バキッ！

背骨が折れる音がした。

男はその場に倒れて悶えた。

「こんなものか。 まとめて掛かつて来いよ」

言つて私は残りの八人を挑発した。

八人は見事挑発に乗り、 襲い掛かつてきた。

私は目にも留まらぬ速さで迫り来る軍勢を一人、 一人、 三人と次々に倒していき、 残り一人まで来た。

「てめえで最後だ！」

言つて私は拳を相手に当て・・・よつとしたが、 既の所で留められ、 天と地が引っくり返った。

一瞬、 何が起こったのか分からなかつた。

気が付くと、 私は倒れていた。

今のは・・・背負い投げ？

「悪いな。 僕、 柔道やつてんだ。 下手な真似すると怪我びこひじゅ

済まないぜ」

「そうか。次からは気を付けよう」

私はこの体勢から空中に跳ね上がり立った。

「何だ、未だやるのか。辞めといった方が良いんじゃないの？」

「それは私のプライドが許さないからな。悪いがお前は意地でも潰させて貰う」

「そうか。だつたら俺も容赦しねえ」

言つて男は構えながらステップを始めた。

「一応正当防衛にしたい。掛かってきてくれ」

「そんな事言つて後悔しても知らねえからな！」

私はそう言つて男に近付いた。

男が手を伸ばしてくる。

私はそれを擦り抜けて男の懷に辿り着いた。

「ふんっ」

私は男の鳩尾を殴つて怯ませ、顎に膝蹴りを食らわせた。

しかし男は倒れず、蹠踉めぐだけだった。

私はその隙に男を蹴つて後方に跳んで離れ、後方宙返りして着地した。

「ふつ、今のは一寸痛かつたぞ」

言つて男は不気味に微笑んだ。

何なんだ此奴・・・強い。

「どうした、来ないのか？ならこっちから行くぞ」

男はそう言つと駆けて私を殴り飛ばした。

「うわっ！」

私の体は宙を舞つた。

目の前に男が現れる。

「あの世に逝つちまいか！」

男は私を斜めに叩き落とした。

「うつ！」

背中を地面に打ち付けられた私の体はバウンドして腹這いになつ

て止まつた。

「くつ・・・！」

私は立ち上がろうとしたが、体に力が入らずに崩れてしまった。

「お前よ、俺の女にならないか？お前、容姿もそれなりにイケてるしな」

「それは有り難う。でもあんたの女になるのだけは勘弁だ」

「そうか、残念だな。俺の女になつてくれれば助けてやつたのによ」

「貴様の女になつて助けて貰うぐらいなら死んだ方がマシだ」

私がそう言つと、男が顔面を蹴り付けてきた。

「おぶつ！」

鼻血が垂れてくれる。

「本当に殺すぜ、お前？」

何とかしなくては。

私は残された力を使って立ち上がる。

「何だ、立てるのか」

男はそう言つと、後退して助走スペースを作つて駆け手前で回転。遠心力を上乗せした強力なキックを私の腹に叩き込んだ。

「がはつ！」

私は吐血し、地面を数メートル転がるも、何とか立ち上がる。

「立つのが精一杯か？」

と顔面を殴り付けてくる男。

ガスン！

鈍い音と共に私は躊躇めき、体勢を整えるのに失敗して倒れた。勝算は無かつた。それでも私は立ち上がり、チャンスを待つ。

「いい加減にしたらどうだ」

男が駆けてきた。

私はしゃがんで攻撃を避けた。

「何！？」

伸ばした男の拳が空を切る。

「ふんつ」

私は両手を地面に着けて両足で相手を蹴り上げた。

バランスを崩した男の体が仰向けに倒れた。

私は直ぐ様立ち上がり、M字開脚で男の上に跨った。

「どうやら私の勝ちのようだ」

そう言つて私は男の顔面を一発殴り付けようとしたが、既の所で止めた。

男が何か言おうとしている。

私はそれに耳を傾けた。

「お前、パンツ見えてる」

「だから？」

ガスン！

殴つていた。

「全然効いてねえからな」

言つて男は無理矢理起き上がろうとした。

フェアじゃないが、私は男の息子を殴り付けた。

「うおっ！」

男は激痛に悶えた。

頻りに息子を押さえる男。

「お前、卑怯だぞ」

「そんなの知るかあ！」

ガスン！

私が男の顔面を思いつ切り殴り付けてやると、同時に男は白眼を剥いて氣絶した。

「はあ」

全てが終わり、安堵の溜め息を吐くと、私は連絡先をこつそり男の懷に忍ばせる。

『リベンジしたければ何時でも相手してやる。好きな時に掛けてこい。番号は - - だ』

「姉貴か？」

突然の声に私は驚いて顔を向けた。

顔を痣だらけにした弟の有紀雄が視界に映る。

「やっぱ姉貴か」

絡まれてたのは此奴だったのか。

「べ、別に助けたくて助けた訳じゃないからな。勘違いするんじゃねえぞ」

そう言って立ち上がり、去ろうとすると、私の体はフフフフと倒れてしまった。

「無理すんな。負ぶつてやるよ」

有紀雄が私の体を背中に乗せた。

「礼なんか言わねえからな」

「素直じゃないな、全く」

その言葉に私は「五月蠅えな」と言いながら微笑んだ。

その後、私たちはその場を離れ、自宅へと帰つて行つた。

自宅に着き、リビングで弟の手当を受けていた私は、弟にこう訳ねた。

「お前さ、何で絡まれてたんだ？」

弟はそれにこう答える。

「電車ん中で煙草吸つてる奴が居たんだ。皆迷惑してたけど怖くて注意出来ないでいた。だから俺、そいつの顔面を蹴り付けてやつたんだ。そしたら顔覚えられてあの河原で絡まれたつて訳」

「お前はバカか？電車ん中で平気な顔して煙草吸つてる奴は裏にヤバイ連中が付いてるんだ。喧嘩にも勝てねえ奴がそんな事すんじゃねえよ」

「ああ。だから今度からは姉貴にちゃんと言つな」

「・・・私を面倒に巻き込むな」

だが弟は聽かぬ振りをして手当を続ける。

「つ！」

弟が塗つた消毒液が頬の傷に染みる。

「悪い、染みたか？」

弟が心配そうな顔で訊ねた。

「心配してくれて有り難うな。大丈夫だ」

「姉貴、痛きや我慢しないで痛いって言ってくれて構わないぞ」「我慢なんか・・・してねえよ」

「あ、そ」

その時、ぐうぐと一人の腹の虫が鳴る。

そう言えば、晩飯を食つていなかつた。当然それは、有紀雄も同じだ。

「何か作るか」

「俺、炒飯食いてえ。姉貴の作る炒飯つて美味えからぢ」

「そうか。そう言ってくれると嬉しい。お礼に褒美をくれてやる」  
言つて私は弟の唇を奪つた。その時間はほんの僅か。

「ちょつ、姉貴？」

「どうした？」

「いや、あのや、キスつてのは、好きな相手とやるもんなんじやないのか？」

「私はお前が好きだぞ」

「姉貴・・・」

「弟としてな」

途端、ズザーっと引つくり返つて滑る弟、有紀雄。

「どうした、有紀雄。女の子にキスして貰えたのがそんなに嬉しかつたのか？」

私は立ち上がりつて有紀雄に近付いてしゃがんだ。

「なんなら大サービスだ。もう一度キスしてやる」

私は再び自分の唇を有紀雄のそれに近付けて重ねた。

「んー！」

口を塞がれた弟は鼻で必死に何かを訴える。

私は一旦、唇を離してこう言つ。

「どうか、ディープキスをして欲しいのか。ならしてやる」

私は三度唇を弟のそれに近付けて重ね、舌を口の中に挿入した。

ガブツ！

弟が私の舌を思いつ切り噛んだ。

ガスン！

私は弟の頬を殴つて怯ませた隙に顔を離した。

「何すんだてめえ！？」

胸倉を掴んで睨んでやる。

「私はてめえがして欲しいつて言うからしてやつたんだぞ！？」

「否、言つてねえから。と言うかそもそも姉貴が勘違いしたんじゃねえか。俺はな・・・っ！」

有紀雄が言い掛けた所で、私は立ち上がりつて彼の腹に膝蹴りを見舞いした。

「うつ！」

呻き声を上げる有紀雄。

「御託なんか訊いてねえんだよ。お前、舌噛んだから飯抜きな」

「え、それだけは！」

「五月蠅い！」

私は有紀雄の体を前方に放り投げた。

ドガツ！

弟は壁にぶつかつてズルズルと落ちて床に横になった。

「死ぬわ！」

弟が立ち上がりつて身の毛がよだつ程悍ましい顔で言つた。

「その顔怖いからな、お前」

「誰の所為だよ！？」

「お前の自業自得」

「マジで言つてるんすか、それ？」

と今度は引き攀り笑いの有紀雄。

「お前は自分が悪いとは思つていなか？言つとくが舌を噛んだのは100%お前が悪いぞ」

「否、俺は全然悪くないよ！姉貴がキスしてきたのがいけないんだ

よー。」

「何だ。キスして欲しかったんじゃないのか」

「あのな、俺は姉弟でキスなんかしようとは思わないし、実姉にキ

スされたつて嬉しくも何ともない」

「そうか・・・それはショックだ・・・だから飯は抜きだ」

「何でだよー!?」

ガスン！

五月蠅いから殴つてやつた。

「俺何もしてないッスよね！?」

「知るか」

私は足払いの弟の体を倒し、腹をグイグイ足で踏み付けた。

「姉貴、痛いからやめてくれ」

「男なら我慢な」

「そう言つ問題じゃないでしょ！」

どぐしつつ！

五月蠅いから脇腹を思いつ切り蹴つた。

「うつ！」

弟は呻き声を上げて静かになつた。

私は救急箱を片付けてキツチンに移動し、一人分の炒飯を作つて一つはサランラップをしてテーブルに置き、もう一つは自分の胃袋に詰め込んだ。

飯抜き宣言をしておきながら結局二人分作つてゐる私。言つてゐる事とやつてる事が矛盾していた。

「有紀雄、何時まで寝てんだ？」

私が声を掛けると、有紀雄が目を覚まして起き上がつた。

「あ、炒飯出来たの？」

有紀雄が私を見ながら訊ねる。

「ああ。お前の為に愛情をたっぷり込めて作つたから美味だぞ」

「姉弟愛つて奴？」

弟が椅子に座つてスプーンを取る。

「あのや、何でラップしてあるの?」

「埃がらない様に」

「あ、そ

弟はラップを外して「頂きます」と食べ始めた。

「どうだ、美味いか？」

うん、最高に美味しい」

そこか それに處か二た  
何と言つても最高級の毒を盛つたから

な 美味し筈だ

有紀雄が驚いて吹き出した炒飯の米粒が私の顔に掛かる。

清心子

んだよ！？ つか死ぬから！」

私は一人で騒ぐ弟を可哀想な者を見る目で見詰めてこう言った。

「お前は「冗談も通じないのか?」

弟の晩夜一ノ飲み込んでしまつた。

「姉貴の冗談はマジに聞こえるんだよ！」

• • • • •

返す言葉が見付からなかつた。

「つーか、俺が吹き出した物食べるなよ」

「捨てるの勿体なしから食べただなか 駄目なのか?」

如貴は俺の唾液平気なのが

「危な

「私の寝ねへり様、そこ

言つて私は改めて食べ始め

言つて利は改めて食へ始めか有難いの炊飯を打差しに

——— ！

有紀雄がまた炒飯を吹き出し、米粒が私の顔に掛かつた。

「汚いからな、有紀雄」

「人の飯に唾液入れんなよ、汚えだろ？！？」

私は再び有紀雄を可哀想な者を見る目で見詰めた。

「お前は冗談も通じないのか？」

そう言いながら私は顔に付着した米粒を搔き集めて口に詰めて飲み込んだ。

弟の唾液ごと飲み込んでしまった。

「また冗談かよ！？」てか姉貴の冗談はマジに聞こえるんだよー！」

「・・・・・」

返す言葉が見付からない。

「やめた。アホらし」

そう言いながら私は立ち上がり、弟の「あんた俺を虐めてたのか？」としつ問い合わせを黙殺して自室に移動し、寝間着に着替えてベッドに横になった。

## Story 6・ゲロ飲み少女（前書き）

注：嘔いゲロを起こす可能性がありますので苦手な方は充分お気を付け下さい。また、吐いても当方では責任は負いませんので予めご了承下さい。

## Story 6・ゲロ飲み少女

土曜日。

学校が半日で終わると、私の席に少女が一人やって来た。一人は円らな瞳と髪型以外、夏奈子とそつくりな子で、もう一人は真田夏奈子だ。

「有紀雄、紹介するわね」

そう言つてそつくりさんを差す夏奈子。

そつくりさんは「真田 夏奈絵です」と名乗り、頭を下げる。

「双子の妹よ。この娘、一寸事情が有つて転校してきたの」

「え、夏奈子に妹居たの？」

「居たわよ」

「でもこの前は会わなかつたよな？」

「この娘、帰国子女なのよ。一昨日までアメリカ亞米利加に居て、昨日帰つてきたの」

「へえ、そつなんだ。で、今日は挨拶つて訳？」

「そう言つ事」

「あの、宜しくお願ひします」

言つて夏奈絵は私にキスした。

「なつ！？一寸、夏奈絵！」

夏奈子が夏奈絵を引き離す。

「・・・・・」

私は言葉が思い浮かばず、夏奈絵を見つめた。

「ごめんね。この娘、亞米利加暮らし長いから」

「柔らかい

「夏奈絵！」

夏奈子が夏奈絵の耳を引っ張り口元に寄せて囁いた。

「（あんた巫座戯てんの！？有紀雄は私の彼氏なのよ！？有紀雄の

彼女でもないあんたが勝手にキスしないで！）」

「夏奈子、そんなに怒るなつて。此奴だつて悪氣が有つてやつた訳  
じゃねえんだからよ」

「・・・有紀雄がそう言つんなら、許してあげるけど・・・」

と夏奈子は夏奈絵の耳を放した。

「んじや、帰るか。夏奈子」

私がそう言つと、夏奈子が可哀想な者を見る目で見詰めてきた。  
「はあ・・・可哀想に。あんたつて、自己紹介も出来ないの?」

「澤田 有紀雄だ」

「見た目は格好良いけど中身はただの変態よ」

私が名乗ると夏奈子が要らぬ事を言いやがつた。

「夏奈子ちゃん、それは違「キモーイ」

私が言い終える直前に夏奈子が言つた。

「何が?」

「ちゃん付けが」

私は辺りを見回して三人以外に誰かが残つてている事を確認すると  
大声でこう言つた。

「皆、聞いてくれー!」のクラスに居る真田 夏奈子つて、バイなん  
だつてよ!」

すると夏奈子の中でブチッと何かが切れた。堪忍袋の緒か、疑問  
符。

「あーんーたーねー!」

夏奈子が私を睨む。

「一寸来なさい!」

私は夏奈子に腕を掴まれて廊下に連れ出された。

「今ので私が同性もありだつて勘違いされたらビリするのよー?」

私は教室の方に耳を傾けた。

「真田がバイ? マジかよ」

「バイつて何?」

「ああ、バイつてのは、男でも女でもどっちでもありつて意味だよ

既に話題になつていた。

「有紀雄！」

「事実だろ？」

「今すぐ取り消さないと死ぬまでこれで殴るわよ！？」

言つて取り出したのは釘を打つトンカチだった。

夏奈子が恐ろしくなつた私は「取り消してきますー」と慌てて教室に入つて皆に嘘だと伝えた。

帰り仕度をして校舎を跡にした私たち三人は、校門の前を歩いていた。

右に夏奈子、左に夏奈絵。両手に花とはこの事か。

「モテモテねえ」

唐突に夏奈子が言った。

「何が」

「あんたよ、あ・ん・た。女の子一人に挟まれて歩くなんてあまり無いでしょ？」

「小学校ん時はしょっちゅうだつたけど」とは言つても、男一人だが。

「・・・・・」

夏奈子が珍しそうな物を見る感じで見詰めた。

「何だよその顔？」

「あんたがねえ・・・・」

「？？？」

「ま、確かにイケメンだし、有り得るかも。でも性格がねえ・・・」

「何が言いたいんだ？」

「何でも無い。それより何か食べて行こつよ。駅前の美味しいお店知つてるからさ」

「良いよ。真田は？」

と夏奈絵に振る。

「え、あ、あたしは、その、二人の邪魔になるし・・・」

「何遠慮してんのよ  
え、良いの？」

「良いに決まってるじゃない。ね？」

と私は振る夏奈子。

「あ、ああ、勿論だ」

人数が多い方が楽しいからな。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

こうして三人は、夏奈子が知ってると言う駅前のお店に行く事になつた。

「あそこよ」

駅前に来ると、夏奈子が古臭そうなそば屋を指差した。

「……」

私と夏奈絵は言葉を失つた。

「どうしたの？」

「否、随分と古いなと思つて」

「何か今にも崩れそうだよね」

「関係無いでしょそんなの。要は美味しければ良いのよ、美味しければ」

「そもそも美味しいのか？」

「私の舌に狂いは無いわよ」

夏奈子はそう言うと一人先にその店に入つて行つた。  
正直こんな所で食いたくない。

私は夏奈絵の手を掴むと、駅まで駆けていた。

「え、え？ お蕎麦は？」

「あんな所で食えるか。構わず走れ。夏奈子が出て来る前に

私は時折後ろを顧みながら走り続ける。

「お姉ちゃん怒るんじゃないかな？」

「あいつが怒つても怖くねえ」

そう言い切つて私は定期を出して改札を抜けた。

夏奈絵も定期を出して続く。

「間もなく、2番線に電車が

」

と電車進入のアナウンス。

私たちは2番線ホームに向かい、丁度停車してドアを開いた電車に乗り込んだ。

ドアが閉まり、電車が発車する。

「どうしたかな、あいつ？」

「有紀雄？」

背後から声がした。

私は恐る恐る後ろを見た。

そこには、何かを企んでいる様な笑みを浮かべた夏奈子が立っていた。

「お姉ちゃん、何時から居たの？」

と訊ねる夏奈絵。

「ずっと居たわよ。有紀雄、降りたら覚えておきなさいね」

「降りねえ」

「あんた、何処まで行くつもり？」

「何処でも良いだろ」

「良くないわよ。あんた、自分が何したか解つてるの？折角お店を教えてあげたのに逃げたのよ？それなりの覚悟つて物はあるんでしょうね？」

「何だ、覚悟つて？」

電車が止まり、ドアが開いた。

夏奈子は咄嗟に私の手を掴んで電車を降りた。  
妹もそれに続く。

「俺、もう一駅先なんだけど」

と言つてゐる間にドアが閉まり発車してしまつ。

「なつ、行つちまつたじやねえか！」

「知らないわよ。そんな事より、今から家に来なさい

「はあ？ 何で」

「良いから来なさい」

その言葉に私は少し考えて行く事にした。

「解ったよ。行けば良いんだろ？」

言つて私は三人で真田家へ向かつた。

「で、お前の言う覚悟つてのはこれか？」

私は夏奈子ん家のキッチンに立ちながら、横に居る当人に訊ねた。

「誰の所為でお昼食べ損ねたと思つてる訳？ あんたの所為よ、あ・

ん・た・の」

「・・・リクエストは？」

「え？」

「リクエストだよ。何が食いたいんだ？」

「そうね・・・」

夏奈子は考え込んだ。

「うん、この間あんたの家で食べた炒飯で良いわ」「  
よし、解つた。下がつて」

「何でよ？」

「味を盗まれたくないから」

「あ、そ」

夏奈子はキッチンを跡にした。

私はキッチンを適当に漁り、材料を見付けると料理を始めた。  
そして作業から僅か30分。三人分の炒飯が完成した。

「夏奈子、炒飯出来たぞ！」

そう言つと、夏奈子が夏奈絵と一緒にやつてきた。

私は夏奈子と夏奈絵にお皿に盛つた炒飯を渡した。

二人は食卓に着いて「頂きます」と炒飯を口に運んだ。

「美味しいか？」

そう訊ねながら、私も炒飯を持つて食卓に着き、食べ始めた。

「お、美味しいです」

と夏奈絵。夏奈子はどうだろ？。

「うーん、この前のと比べると余り美味しいわね」  
その言葉、癪しゃくに障つた。あのネタやつてやるか。

「そうか。最高級の猛毒エキスを使つたのに美味しいのか」  
「ふふ―――――！」

夏奈絵が突然吹き出した。あれ？

「あんたバカじゃないの？家に毒なんかある訳無いでしょ。それと  
夏奈絵、今のは有紀雄の悪い冗談だから気にしちゃ駄目よ」  
ちつ、有紀雄ん時みたいに行かないか。だつたら・・・。  
「持参した猛毒エキスなんだ」

「・・・・」

一人が口を閉ざして可哀想な者を見る目で見詰めてきた。

「（バカって言つてやりなさい）」

と夏奈子が夏奈絵に耳打ちをする。

「あの、お姉ちゃんがバカって言つてます」

「夏奈絵！」

「夏奈子、冗談を間に受けないお前の方がバカだからな」  
そう言つと、ぐちやつと私の顔に炒飯が半分程残つているお皿が  
被せられた。

「ごめーん、手が滑っちゃつた。大丈夫？」

私は皿を退かしてテーブルの上に置くと、顔に付着した米粒を搔  
き集めて口に詰めて飲み込んだ。

「お前な、人が作つた食べ物を粗末にするな」

「大丈夫よ。被せたのはあんたのだから」

「何！？」

私は自分の皿を見た。確かに、顔が埋まつた跡がある

「夏奈子、お前飯抜きな」

私は自分の飯を平らげ、夏奈子のを取りあげた。  
「何すんのよ！？人が折角食べてんのに！」

「知るか。飯を粗末に扱う奴には飯なんかあげねえ」  
私はそう言つて夏奈子の分も平らげた。

「私の炒飯よ！？」

夏奈子が椅子の上に立ち、テーブル越えて襲つてきた。

「うわっ！」

椅子から投げ出された私は、床に落ちて夏奈子の下敷になつた。

「お、落ち着け夏奈子！」

「五月蠅いわね！今すぐ吐き出しなさい！」

無茶な注文だ。

やつてやれない事は無いが・・・省、やっぱ無理だ。夏奈子に私の胃液」と食わせるなんて無理！

「ほら、早く吐きなさいよ！」

「お、お前は吐いた物をどうするんだ？」

「食べるに決まってるでしょ！？」

その時、夏奈絵が引いたのは言つまでも無い。

「お前、俺の胃液」と食つ気か？」

「それがどうしたって言つのよ！？」

「胃液だぞ、気持悪くねえか？」

「あなたのなら平気よ」

「・・・・・・」

私は夏奈子の言葉に引き攣つた。

「何よその顔！？」

「い、今、私の中のお前の株が下がった」

「下げるな、上げろ！」

「解つた、解つたから少し落ち着け、な？」

「私の炒飯返してくれたらね！」

言つて夏奈子はブイツと横を向いた。  
食つて気が済むならそつとさせてやるか。

「夏奈子、俺の腹を思いつ切り叩け」

「思いつ切り？」

「ああ、そうだ

ガスンツ！

夏奈子の強力なパンチが腹に食い込んだ。

「う、つ！」

何かが私の胃から食道へ上がってきて、口内に溜まる。傍らで顔を真っ青にして佇んでいる妹が確認出来る。

私は夏奈子の顔をこちらに向けて唇を近付ける。

夏奈子は抵抗もせず、口と口を合わせた。

私は夏奈子の口内に炒飯グロを送り込んだ。

ゴクゴクとそれを飲む夏奈子。とても気持悪い奴だと思った。

「ふはつ」

飲み終わった夏奈子が唇を離した。

「ご馳走様、美味しかったわ」

此奴、イカれてる。

「気持、悪く、ないか？」

「平気よ、あんたのだから」

マジで引くわ此奴。

## Story 7・女はキレると殺人マシーンになる（前書き）

女はキレると何をするか解らない第7話。

「女がキレると平氣で人殺すって本当ですか?  
んな訳ありませんよね・・・」

## Story 7・女はキレイと殺人マシーンになる

2月14日、バレンタインデー。

今日は女の子が好きな男の子にチョコレートをプレゼントする特別な日である。

私はその前日、チョコレートを作りつと買つてきたカカオを発酵させる為水に浸けておいた。

それを今、水から出してカカオ豆を取り出して焙煎している所である。

そこへ有紀雄がやつて来て訊ねる。

「姉貴、何やつてんの？」

「カカオからチョコレートを作りつとしているんだ」

「マジかよ。て言つて出来るの買つてきて溶かせば良いじゃん」

「それだと手作りの意味が無くなるだろ。そもそも手作りと言つのは一から作るものだ。途中まで出来るのを買つてきたのでは手作りとは言えない」

「ふうん。で、誰にあげるんだ？」

「決まつてるだろ。夏奈子だ」

私がそう答えると、有紀雄が「プツ」と吹き出した。

「今笑つたな」

「だつてよ姉貴、バレンタインデーつて女が男にプレゼントする日だろ？今の姉貴は男だ。それの側がしてどうするんだよ？」

「それもそうだな。よし、それじゃあお前が彼にあげる」

「え、俺が？」

「当然だ。今のお前は女で私が惚れた男と付き合つてこる。あげなきや拙いだろ

「断る」

「そうか、それじゃ仕方ない。やはり夏奈子にあげよつ

そう言いながら私は焙煎が終わったカカオ豆を、皮と胚芽を除き、

磨り潰して固形状に固めた。

その後、出来上がった力カオマスを溶かし、お砂糖を加えハート形に型を取つて固め、I LOVE YOことピンクの文字を書く。

「甘そうだな。味見していいか?」

私は有紀雄の言葉を黙殺して完成したチョコレートを箱に詰めて包装した。

「んじゃ、一寸行つてくるから留守番頼むな」

そう言つて私は夏奈子の所に行く為チョコレートを持つて家を出了た。

「あ

出た所で私は足を止めた。

門の向こうに夏奈子が立つてゐる。

「あら、私が来た事よく分かつたわね」

「偶然だよ。俺も今、お前ん家行こうと思つてた所だし。つーか、何の用だ?」

そう問い合わせる門を開けて夏奈子を中に入れてやる。

「有紀雄、今日は何の日?」

「バレンタインデー」

「そう。だから、チョコレートを持って来てあげたわ」

「有り難う」

私は夏奈子のチョコレートを受け取つた。

「それはそうと、俺もお前の為に心を込めて力カオからチョコレートを作つたんだ。良かつたら食べてくれないか?」

そう言つて私は夏奈子に出来たてのチョコレートを渡した。

「有り難う。て言つか、バレンタインデーよね?」

「そうだけど?」

「女の子が好きな男の子にチョコレートをあげる日よね?」

「だから?」

「あんた、男よね」

夏奈子が可哀想な者を見る様な目で見詰める。

「何だよその田、何が言いたいんだ？」

「別に。何でもないわ」

「あ、そ。まあ良いや。折角来たんだし上がつてけよ」

「そうね、そうさせて貰つわ。つて言いたいけどこれからバイトな  
のよね」

「そうか。それは残念だ」

「うん、残念だね。変態行為が出来なくて」

「変態言つな！」

「別に良いじゃない、本当の事なんだから。それとも何？変態から  
足を洗つてまともな人間になつたつて言つの？」

「端から変態じやねえし」

「あ、ん。まあ良いわ。それじゃ私、もう行くね」

そう言つてバイトに行つとした夏奈子を、私は腕を掴んで引き  
留めた。

「何？」

と夏奈子は疑問の表情で振り向いた。  
私はその彼女を家の中に連れ込んだ。

「ちょつ、何なのよ！？」

「バイトなんか行くな」

その言葉に夏奈子は「はあ！？」と素つ頗狂な声を上げる？

「何で行つちゃいけないのよ？」

「お前と一緒に居られる時間が減るから」

その言葉に夏奈子は頬を赤く染めた。

「あ、あんたそんなに、私の事を必要として……。解つたわ、行  
かない。今日はあんたと居る」

「良いのか？」

「良いのよ、別に。あんなバイト辞めようとしてたし」

「あんなバイト？お前、今すぐバイト行け」

「何でよーー？」

「バイトの内容が気になつてな」

「気になるな！」

「恥ずかしいバイトなのか？」

「そ、そんな訳無いでしょ！？」

「そうか。じゃあ行け」

「だから何でそういうのよ！？」

「恥ずかしいバイトなのか？」

「…・・・・・」

私の二度目の問い合わせに夏奈子は言葉を失った。

図星らしい。

「夏奈子、行かないと遅刻するぞ

「…・・・・・」

「夏奈子？」

「夏奈子？」

「夏奈子？」

「夏奈子？」

「夏奈子？」

「おーい

田の前で手を振つてみる。

「ああつ、五月蠅い<sup>うつさ</sup>わね！行けば良いんでしょ、行けば！」

夏奈子は私に怒鳴りつけると、バイト先へ向かつた。

私は少し間を開けてその後を追つ。

そして辿り着いた先は、秋葉原のメイド喫茶だった。

お金、あるよな？

私は財布を取り出し、余裕がある事を確認すると店内に入った。

「お帰りなさいませ、ご主つ」

と言い掛けて固まるメイド服の少女。

「何であなたが来るのよー？」

メイド服の少女は私を睨み付けた。

「いやあ、暇だったからね。それに、お前のバイトしてる所に興味あつたから。それはそうと、俺は客で来てるんだから真面目にやつてくれよ、夏奈子」

「・・・お、お帰りさないませ、『主人様』と夏奈子は俯いて言つた。

「じゃないだろ？」

その言葉に夏奈子は「お帰りなさいませ、『主人様！』」と引き攣り笑いで頭を下げる。

「上出来だ。席に案内してくれ

「！」、こちらです

言つて夏奈子は私を空席へと案内し、メニューを半ば投げる様に置いた。

「感じの悪い店員だな、お前」

「五月蠅いわね！あんまり文句言つと田ん玉割り抜いて鼻の穴に詰めるわよー？」

「おー、こわ。客に対してもう言つた事言つのか、店員は

「お決まりになりましたらお手元のボタンを押してお呼び下さい！」

そう言つて夏奈子は私を睨みながら去つて行つた。

私はメニューを取り、何があるのか見てみる。

グウーと腹の虫が鳴ぐ。

そう言えばお昼未だだったな。

私はメニューの中にオムライスを見付けると、それを頼む事にした。

ピンポーン！

お手元のボタンを押す。

すると、夏奈子が慌ててやって來た。

「御注文はお決まりでしょうか？」

と引き攣り笑みで訊ねる夏奈子。

「オムライスとホットコーヒー」

夏奈子が機械にオーダーを打ち込む。

「御注文の確認を致します。オムライスが一つとホットコーヒーが一つ、以上で宜しいですね？」

「あとお前の裸な

「殺すわよ！？」

「冗談だよ。注文はそれでオッケーだ」

黙らじあした。少々お迷か下れー！」

そう言つて再度、私を睨みながら去つて行く夏奈子。  
それから暫くして、再び夏奈子が現れた。

手には私が注文した品を持つている。

「幾舞鶴の事だ。」  
「アバ、豈い。」

「誰の所為よ！？」

俺た  
て言  
かまたお前なのな

からね！？

「夏奈子、此処はメイド喫茶であつてシンテレ喫茶じゃないぞ」

レバカ事ニハナリ詩林林木ニシテ知ニシテ林。

私はその夏奈子の背中に「夏奈子、スマイルな！」と叫んでやる。

五月蠅しれね！」

詩言之過而夏樂之

そう心に決めた私は、コーヒーを一口口に含んだ。

卷之三

何だこれは！？

「主人様、どうがなさいましたか?」

何でしょっぱいんだ、これ？

え、そんな筈は

夏奈子も私と同様にコーヒーを吹き出した。

「何よこれ！？ しょっぱいじゃなー！」

「塩入れたんだな、屹度」

「「「めん、有紀雄。直ぐに変えてくるわね」

「うう言つて夏奈子は塩入コーヒーを厨房へと持つて行き、新しいのと交換して戻ってきた。

「今度はちゃんとしたやつよ」

とコーヒーをテーブルに置いて去らうとする夏奈子。

私はその夏奈子の腕を掴んで引き留めた。

「何よ？ 忙しいんだから用があるんなら早くしてよな」

「お詫びに口移しな」

「・・・・・」

言葉を失う夏奈子。

「どうした、出来ないのか？」

「・・・・・」

「そうか、出来ないのか。残念だ。お前とはもう縁を切らう」

「・・・・・」

「ああ？」

「やるわよ、やれば良いんじょ？」

うう言つて夏奈子はコーヒーを口に含み、それを私の口に近付けてた。

そして、コーヒーが夏奈子の口から私の口の中へと移された。端から見ればただのキスに見えるだろう。

私は移し込まれたコーヒーを「クツ」と飲み込んだ。

「何してるんですか、真田さん？」

と他の店員がやつて来て夏奈子に訊ねた。

夏奈子は驚いて飛び退いた。

私は店員に向かつてこう言つた。

「お詫びにコーヒーを口移しで飲まして貰つたんだ」

「ぐ、口移しですつて！？ そんな破廉恥な事は許しませんよ、お客様さんー！」

そう言つて店員が私を席から立たせて Staff only と書かれた扉の向こうへと無理矢理連れて行く。

このパターン、以前にも遭つた様な・・・。

そんな事を考えていると、いつの間にか数人のメイドに囲まれて問い合わせていた。

「お客さん、お名前と年齢、それから住所の方を教えて下さい」

「澤田 有紀雄、18歳です」

「住所は？」

「それは内緒だ」

私がそう言つと、夏奈子がやつて来て「いつ言った。

「 市の 一丁目、五六の一です」

「何であんたが知つてるのよ？」

私を囲むメイド全員が夏奈子を見る。

「ひょつとして抜け駆け？」

その問いに夏奈子の頬が赤くなる。

「ふうん、そう言つ事。あなた、契約違反ね」

「あの、どう言つ事ですか？」

「この喫茶店で働く者は彼氏を作らない。それがルールなのよ。よつて、あなたはクビ」

「なつ！？」

夏奈子が驚いて固まる。

「それはそうと、お客さん。ウチ店で破廉恥な行為をした事のケジメはしつかり付けないとね」

「ケジメ？」

私が訊ねると、メイドたちは一矢りと笑みを浮かべて一斉に殴り掛けってきた。

辺りに鈍い音が木靈する。

「ぬうおつ！ 夏奈子、どうなつてんだこれはー？」

しかし夏奈子は依然として固まつたまま。

「痛つ！ いてお前ら辞めんかー？」

「そんな言葉、私たちの辞書には載つてないわ  
じぐしつ！」

メイドの一人がそう言つて私の股間を蹴つた。

「あうひー…」

私は激痛に股間を押される。

「あら、ごめんなさい。急所突いたみたいね」

その言葉に続いて今度は別のメイドが私の頬を殴る。

ガスンシ！

一体何時まで続くんだこれ？  
どくしつ！

後ろからケツを蹴られた。

その衝撃で私の体は前に倒れて正面に居るメイドを押し倒した。

「きやあっ、最低ですわ！」

残りのメイドたちが私を下敷になつて居るメイドから離し、強く踏み付ける。

「ちよつ、何やつてんですか！？」

我に返つた夏奈子が驚いて訊ねる。

「何つて、ケジメよ」

「ケジメってそれただのイジメじゃないですか！」

「五月蠅いわね。何か文句あんの？」

その時、夏奈子はキレた。

「私の、私の有紀雄に手を出すなあ！」

夏奈子がタックルで全員を吹っ飛ばした。

「ちよつ、あんた私たちに楯突く気！？」

「突くわ。だつて目の前で彼がやられてるんですもん。見捨てられる訳無いじゃないですか」

「そつ。それじゃあ、あんたもその男みたいにして欲しいって訳？」

「否、それは一寸勘弁して欲しいわね」

「じゃあその男が私たちにボコボコに蹴られるのをソレで見てなさい

い

「それは却下。有紀雄を虐めるなら私が相手になつてあげるわ」

「おい、夏奈子」

「心配しないで、勝つから」

そう言つて夏奈子は私に笑みを向けた。

「あなた一人でこの人数に勝てるのかしら？」

メイドたちが立ち上がり、夏奈子に薄ら笑いをした。  
そして次の瞬間、夏奈子の姿が視界から消えた。  
辺りを見回すと、夏奈子の体が宙を舞つていた。  
メイドたちは驚いて戸惑つている。

「ゴンッ！」

降りてきた夏奈子が一人を倒す。

そして二人、三人、四人と次々に倒していく。

「あんたで最後よ！」

そう言つて最後の一人に回し蹴りを放ち、ロッカーにぶつけてノックアウト。

「手応えないわね」

と手をパンパン扱う。

「こ・・・この女・・・強い。グフッ」

メイドの一人がそう言つて気絶した。

夏奈子、お前つて一体？

「有紀雄、立てる？」

夏奈子が振り返り、私の下に来て手を差し出す。

「有り難う」

私は差し出された手を掴んで立ち上がつた。

「夏奈子、お前つて何かやつてんの？」

「うん。空手と柔道と合氣道とボクシングとムエタイとカポエラとテコンドーと形意拳を少しだけ」

その衝撃的発言を聞いた私は顔が引き攣り後退した。  
「どうしたの？」

「い、今お前が初めて怖い生き物だと思つたよ」

ガンッ！

夏奈子がロッカーに拳を当てた。

横目でチラツと見るとそこだけ思いつ切り凹んでいた。

「私って怖いかしら？」

「こ、怖くないです。夏奈子はとっても優しいです。こんなに優しい彼女は俺には勿体無いなあつて思つたり」

あまりの恐ろしさに鳥肌が立つた私はそう言つていた。

「て言つうかさ、この有り様を見たら店長が怒るんじや？」

「大丈夫よ。最後に倒したのが店長だから」

「マジで？」

私は顔に大きな痣を作つて倒れているメイドを眺めながらそう言った。

「大マジよ」

「そ、そ、うか。そんじやあ俺、戻るな」

言つて私はこの部屋を出て席に戻り、オムライスを平らげ、冷めきつたコーヒーを飲み干し、お会計を済ませて自宅へ帰つた。

その後、夏奈子がクビになつたのは言つまでも無い。

## Story 8・夏奈子、性転換を考えるの巻

満月の日の朝、体に違和感を覚えた私は直ぐに起きて一階に降り、トイレへ入つてズボンを下げた。

スパッツを穿いている。

私は恐る恐るスパッツを下ろした。

すると何と、股間にあつた筈の私の一物が消えていた。私は他に異変が無いか、体の隅々を調べた。

先ず頭。髪が背中まで伸びている。

次に胸。

「ん」

触れてみると感じてしまった。

つーか漏れる！

私は便座を下ろして座つた。

小便が股間を伝つて便器に落ちる。

小便をし終わり、私は紙で股間を拭いてスパッツ、ズボンを穿いて水を流し、トイレから出て洗面所に移動した。

洗面台の鏡を覗くと、そこには美人女性が映つている。私だ。

「よつしゃー、戻つてるー！」

元の姿に戻つている事に喜びを感じた私は思わず叫んだ。

ピンポーン

チャイムが鳴つた。

私は玄関に移動してドアを開けた。

「おはよー、有紀檸」

と、来客の夏奈子が言つ。

「おはよう、夏奈子」

私はそつ言つて夏奈子の唇を奪つた。

「もつ、有紀檸つたら」

夏奈子は頬を赤らめ照れてしまった。

「まあ良いじゃないか。恋人同士なんだし」

「うーん、でもやっぱり恥ずかしいわ。こんな朝っぱらから」

「大丈夫。誰も見て・・・」

その時、背後に気配を感じた私は、恐る恐る振り向いた。

その先には、顔を真っ青にした有紀雄が居た。

「一寸待つて」

私は夏奈子にそう言つて、ドアを閉めて有紀雄をリビングまで連れ込んだ。

「私たち元に戻つてるんだけどどう言つた事？」

「し、知らねえよ。つーか、女同士でキス？」

「恋人同士なんだから問題無いだろ。それとも何か？本当だつたらお前が夏奈子の唇を奪う筈だったのに先に取られて悔しいってか？」

「否、そうじやなくて、女同士でキスする事自体が問題なんだよ。考えてでも見る。恋人と言つのは、男と女の二人組。女と女じゃ変だろ」

「じゃあお前、夏奈子に好きだつて告白してこい」

「何でそうなるんすかね？」

「良いから行つてこい！」

そう言つて私は有紀雄のケツを蹴つてやつた。

「蹴しつ！」

「蹴るなよ！」

「五月蠅え。さつさと行け」

私は有紀雄を睨んだ。

有紀雄は「ひいつ！」と怯えながら玄関まで行き、ドアを開けて夏奈子と対面した。

「よつ、夏奈子」

「あら、有紀雄じゃない。珍しいわね、あんたから話し掛けてくるなんて」

へえ、有紀雄は自分から話し掛けた事が無かつたのか。

「あの、俺、夏奈子の事が好きです！付き合つて下さい！」

「それは何の冗談かしら？」

夏奈子は笑みを浮かべながら訊ねる。

「冗談じゃない。マジなんだ。俺、お前の事が頭から離れず、夜もずっと眠れないんだ」

「それは重傷ね。頭殴れば綺麗サッパリ忘れられるわよ」

夏奈子は有紀雄の告白を受け流し、拳を作つて有紀雄の頭を殴つた。

ポカッ！

「いてつ！何すんだコラーー？」

有紀雄は涙目で夏奈子を睨んだ。

「今ね、付き合つてる人が居るの。だからあんたとは付き合えない。つーか、私あんたの事好きじゃないから」

「だとよ」

と私は有紀雄の斜め右後ろに立つて肩に手を乗せた。

「気にすんな。お前には黒田が居るじゃないか」

「え、有紀雄つて新一と付き合つてんの？」

その問いに有紀雄は「付き合つてねえよ！」と両手を振りながら否定した。

するとそこへ、バッドタイミングで新一が現れた。

「か、夏奈子。来てたんだ？」

「え？」

振り向く夏奈子。

「し、新一！？あんた、何しに来たのよ！？」

「暇だから遊びに来たんだよ」

「有紀雄とデート？」

「違うからね」

「何だ、付き合つてないのか」

「どうからそんな出鱈目な情報が出て来てるの？」

「有紀檸が」

「有紀檸つて？」

「こいつ、私を知らんのか。

「私の恋人よ」

夏奈子がそう言つて私を指差す。

すると新一が私を見て頬を赤らめた。

「新一、有紀檸は私の物だからね」

「夏奈子、やっぱりそっちの気があるんだ。別れて正解だったよ、

僕

「（なあ、姉貴）」

と有紀雄が小声で話し掛けてくる。

「（何だ？）」

「（黒田に告白したら？好きですって）」

「はあ！？」

訳が解らなかつた私は素つ頓狂な声を上げる。

「どうかしたの？」と夏奈子。

「何でも無い」

私はそう言つと、一人を残して有紀雄と共にリビングに移動した。

「有紀雄、私は夏奈子が好きなの。解る？」

「黒田は好きじゃねえのかよ？」

「始めてあいつを目にした時はそうだったが、今は夏奈子だ」

「マジで言つてんのか、それ？」

「ああ、マジだ」

「・・・・・・」

有紀雄が私を可哀想な者を見る目で見詰める。

「何だ、その顔は？」

「否、別に。姉貴が夏奈子を好きなら止めやしないけど、俺はどうなるんだ？」

「お前がどうなると私の知つた事では無い。それにお前はもう失恋しているからな。今更どうって事も無いだろ」

私はそう言い残して玄関に戻つた。

「あれ、夏奈子は？」

夏奈子が不在である事に気付いた私は、新一にそう訊ねた。

「夏奈子なら今、用事を思い出して慌てて帰ったよ」

「ふーん。で、お前は何してるんだ？」

「僕は、澤田と遊びに行こうと思つて、誘いに来ただけ」

私はリビングに居る有紀雄を顧みた。

かなり落ち込んでいる。

「有紀雄は今、落ち込みムードだから駄目だと思つわ」

「そりか。じゃあ今日の所は帰る。そう伝えといて下さい」

新一はそう言つて踵を返した。

「待つた」

「え？」

「お前、暇なんだろ？これから私とデートしないか？」

「何を言つてるんだ私は？」

「で、デートつてそんな！僕があなたの様なお美しいお方となんて勿体ないですよ！」

その言葉に私は心惹かれた。

今まで、私を美しいと言つてくれた男など居なかつたから。

「そ、そんな事言われると、惚れちまつぞ？」

言つて私は頬を赤らめた。

超恥ずかしいわ！

「それじゃあ惚れて下さい」

「え？」

「僕、貴方を見た時、ドキッとしました。だから、貴方も僕に惚れて下さい」

その言葉に、私の心臓が高鳴る。

「あの、僕、黒田 新一とります。貴方は？」

「わ、私は澤田 有紀檸。有紀雄の双子の姉だ

「え、澤田くんのお姉さんですか！？」

新一は驚いて目を大きく開けた。

「そんな、彼にこんな美しいお姉さんが居たなんて知らなかつた

「夏奈子どどっちが美しい？」

「夏奈子なんか比べ物にならないくらい」

「そ、それは何か、嬉しいな。よし、お礼にプレゼントだ」

私はそう言つて新一の唇を奪つた。

「ん！？」

驚き戸惑う新一。

「ふはっ」

私は唇を離し、新一を見詰める。

「あ、あの、僕なんかとして良いんですか！？」

「良いんだ、別に」

「で、でも、夏奈子に知られたら……」

「大丈夫だ」

私はそう言つて再度、新一の唇を奪つた。

「有紀檸、何やつてんのよ？」

塀の陰から姿を現した夏奈子が私を睨んできた。

「夏奈子！？お前、帰つたんじや？」

私は慌てて唇を離しそう訊ねた。

「帰ろうとしたんだけどさ、頭の中で戻れつて声がして」  
嘘だ。此奴絶対此処に居た。

「それよりあんた、今何してたのよ？」

「何つて、何もしてないよ？」

「嘘。新一とキスしてた。私見てたんだからね」

「「じめん。怒つてる？」

「当然よ！あんたがそんな奴だったなんて知らなかつた！さよなら

！」

夏奈子はそう言つて走り去つた。

「一寸待て夏奈子！」

私は慌てて夏奈子を追つ。

「来ないで！あんたなんか大ッ嫌いよ！」

そう言つて夏奈子は速度を上げるが、道に落ちていた小石で足を

躓き転倒した。

私は近付いて声を掛ける。

「大丈夫か?」

「放つといて」

そう言つて立ち上がるつと夏奈子だが、足を挫いてしまつて立てなかつた。

「『めんな、夏奈子。 もつしないから』

「信じられないわね」

「どうしたら信じてくれるんだ?」

「家まで送つて」

「任せる」

そう言つて私は、夏奈子を背中に乗せて家まで向かつた。駅に着き、電車に乗り、隣の駅で降り、少し歩いて真田家に到着し、中に入つて夏奈子の部屋を手指す。

「有り難う」

部屋に入つてベッドに座らせた所で、私は夏奈子にそう言われた。私は夏奈子に笑みを返した。

「ねえ、有紀檸」

「ん?」

「私の事、好き?」

「勿論、好きだ。大好きだ」

「そう。良かつた。じゃあさ、キスしてよ」

その時、私の頭に有紀雄の言葉が過つた。

『女同士でキスする事自体が問題なんだよ』

「ねえ、してよ。キス」

「へつ?」

「キス」

「あ、ああ。解つた」

私はゴクリと唾を飲み込み、唇を夏奈子に近付けるが、重ねる事に躊躇いが生じた。

すると夏奈子の方から、唇を重ねてきた。

驚き戸惑う私。

「ふはっ」

唇を離す夏奈子。

「有紀檸、何か変」

「今のは有紀檸、心此処にあらずって感じだよ。何か悩みでも？」

「否、そんな事無いって！」

私は両手を振りながら否定した。

「じゃ、私は帰るな」

「え、帰るの？」

「ああ。帰つて有紀雄に飯作つてやらなきや」

「そう。じゃあまた明日」

「ああ」

私は夏奈子の部屋を出てドアに寄り掛かった。

「はあ」

と小さな溜め息。

私、ホントに夏奈子が好きなのかな。

私は夏奈子の顔を頭に浮かべた。

するとその顔が新一の顔に変化を遂げた。

「やつぱそつちか」

私はそう呟くと、真田家を跡にし、血をくと戻った。家に着くと、帰宅しようとしていた新一に出会った。

「お前、居たのか？」

「あ、有紀檸さん。夏奈子はどうでした？」

「大丈夫だったぞ。つーかお前の方はどうなんだ？」

「どうつて？」

「先刻のだよ。私に惚れろつて言つたわ。あれ、もう少し考えてみたら？」

「うん。じゃあそつする」

そう言つて新一は帰つて行つた。

何をしてるんだ私は。私はあいつが好きじゃないのか。  
なんて考えてても仕方ないか。

私は家に上がり、部屋に入った。

ベッドには有紀雄が横たわっていた。

「有紀雄、人の部屋で何してる？」

「人のつて、俺の部屋だよ。姉貴のはあつち

「あ、そつか。元に戻ったんだつけな」

私は笑いながら部屋を出て向かい側にある自分の部屋に入った。

「何だこの有り様！？」

私は部屋の散らかり様を見て驚いた。

「有紀雄、一寸来い！」

私が叫ぶと、有紀雄が面倒臭そうな顔でやって来た。

「何だ、これは？」

「何つて、散らかった部屋

「そんなの見りや判る。どうしてこんなに散らかっているのだ？」

「片付け面倒だなあつて思つてたらいつの間にか貯まつてた」

「ほお、そつか。お前は私に喧嘩を売つてているのだな？」

そう言つて私は拳をポキポキ鳴らす。

「今すぐ綺麗にしろ。でなきや鉄拳が飛ぶぞ」

「メンドイ

「そつか。ならお仕置きだな」

そう言つて私は拳を有紀雄の顔面に埋すめ、怯んだ隙にしゃがんで顎を蹴り上げ、宙に舞つた所で連続キックを1・580発程お見舞いし、飛び上がつて踵落としを放つた。

有紀雄は床に激突すると数回バウンドして仰向けに横たわつた。

「あ、姉貴・・・殺す気か・・・？」

「殺しはしない、安心しろ

「けど俺、もう死にそう」

「そつか。じゃあ死ね」

そう言つて私は助走を付けて有紀雄を蹴り飛ばした。

「うおわっ！」

有紀雄の体は通路を真っ直ぐ飛行して突き当たりの壁に激突して床に落ちた。

「死ぬわ！」

有紀雄が立ち上がり、私の下に駆けて来て睨みながら言った。  
「それだけ元気ありや大丈夫だ。それより早く綺麗にしてくれ」  
「自分の部屋なんだから自分でやれば良いだろ」

「お前、本当に殺すぞ？」

「・・・・・」

有紀雄は怯えると、私の部屋に入つて掃除を始めた。

「私は下に居るからな。しつかりやるんだぞ」

「了解でーす」

有紀雄は半ベソを搔きながら、元気の無い声で返事した。  
私はその場を離れ、階段で一階に降りるとリビングに移動し、ソファに座つてテレビを付けた。

すると画面に病院の手術室が映り、性転換手術がどうたらかんたらとテロップが出ていた。

私はその番組を見入つてしまい、時間が経つのを忘れた。  
そして気が付くと、時刻は午後三時を迎えていた。

私は立ち上がり、部屋の様子を見に行つた。

「ちゃんとやつて・・・！」

私が部屋を覗くと、散らかしたたままで有紀雄が私のベッドで気持良さそうに寝ていた。

私はその有紀雄に近付き、顔面を殴つて起こした。

「貴様、何をサボつているんだ！？」

「ひいっ！」

有紀雄が怯えた顔で飛び起きる。

「サボつてないで片付ける。でなきや東京湾に重り付けて沈めるからな」

「段々とスケールが大きくなつてますね！」

「驚いてる暇があつたら早く動け！」

そう言つて私は有紀雄をベッドから引きずり下ろしてケツを蹴つてやつた。

「いてつ！」

「片付けないと蹴り続けるからな」

「今やりまーす！」

そう言つて有紀雄は掃除を再開した。

私はベッドに座つて有紀雄がサボらない様にそれを見物する。それはそうと、性転換手術か。

受けけるとなると相当な金が必要だな。

性転換手術に興味を持った私はそんな事を考え始めた。

「つて、何休んでんだてめえはーー？」

私は立ち上がり、手を休めていた有紀雄の頭に蹴りをくれてやつた。

「いてつ！」

「やる気あんのかてめえ？」

「ありますともー」

有紀雄は涙目になりながら元気の無い声でそう言つと手を動かし始めた。

私はもう一度ベッドに座つて性転換手術について考へる。

仮に私が性転換したとして、夏奈子は喜ぶだろうか？

「んー・・・・」

私は唸りながら、私が性転換を受ける事を知つた夏奈子の顔を浮かべる。

・・・・・・。

浮かばなかつた。

「有紀雄、片付けながらで良いから聴いてくれ

「何だ？」

「性転換手術つて知つてるか？」

「ああ、知つてる。つて、姉貴まさか受けるのーー？」

「まあ、考えてはいるが・・・」

「マジで！？」

有紀雄が手を止めて私を見る。

「姉貴、どうして急にそんな！？」

「夏奈子の為かな。まあ別このままでも良いくんだけど、それだと将来困るからな」

「困るって何が？」

「結婚だ。私、夏奈子と結婚するつもりでいるんだ。だから、女士の結婚はこの国じや認めてない。だから」

「それ、夏奈子には相談したのか？」

「してない」

「どうか。じゃあした方が良いかもな」

「そうだな」

私は横になり、畳を瞑つた。

そしてそのまま眠りに入り、翌朝畳を覚ました。

部屋を見ると、綺麗に片付いていた。

夏奈子ん家行くか。

私はベッドから出ると、バスタオルを持って脱衣所に移動した。服を脱ぎ、裸になつて浴室に入る。

「えつ？」

中には夏奈子が居た。

「何やつてんの？」

「あ、有紀櫻。おひみつ

「おはよう。つーか家の風呂で何してんの？」

「見て判らない？シャワー浴びてるのよ。今朝、家のお風呂壊れちゃつてさ。それで、借りに来ちゃつた」

「そうか、それは災難だつたな。それより聞いてくれないか？」

「何？」

「私、性転換手術を受けようと思つんだ」

「はあ！？」

夏奈子は訳が解らず素つ頓狂な声を上げた。

「性転換手術だ。昨日、考えたんだけど、女同士の恋人つてのはやつぱ拙いよ。どっちかが男にならなきゃ。やつだろ？」

「駄目」

「え？」

「手術なんか受けちゃ駄目」

「何でだよ？」

「だつて、有紀樽が男なんかになつたら、私が有紀樽の子ども産まなきやいけなくなるもん。だからお願ひ。考え直して」

「や、それはつまり、お前も考えてるつて事か？」

「まあ、一応」

「んー・・・」

私は唸りながら、夏奈子に産ませるシーンと私が産むシーンを思い浮かべた。

「産みたいかも」

「じゃあ、私が受けれるよ。その手術」

「良いのか？」

「うん。私ね、本当は男に生まれたかったんだ。だから、思い切つて受けれる」

夏奈子はそう言つと「じゃあ」と残して浴室を出て行つた。

夏奈子が男ねえ。となると私は男になつた夏奈子にあんな事やこんな事をされるつて訳か。何か凄く楽しみだ。

私はそんな事を考えながら、シャワーを浴び、頭と体を洗い、浴室を出てバスタオルで体を拭き、自室へと向かつた。

その途中、階段の前のトイレから有紀雄が出て来て私の裸を見て鼻血を出した。

「あ、姉貴。裸体で家ん中彷徨くのやめてくれ」

「別に良いだろ。今、男はお前しか居ないんだからな」

「そう言つ問題じやねえよ」

「じゃあどう言つ問題なんだ？」

「裸で彷徨かれたと襲いたくなるんだ」

「そうか。じゃあ襲えば良いじゃないか。好きなだけ襲われてやるぞ」

「マジで！？ ヤツホーイ！」

有紀雄がそう叫んで押し倒そうとしてきた。

「ふんっ」

私は素早く避けて顎を蹴り上げ、宙に舞つた有紀雄の体に2・500発の蹴りをお見舞いし、飛び上がって止めた踵落としを放つた。有紀雄は床に叩き付けられ、数回バウンドしてうつ伏せに状態になつた。

「どうした。もう襲わないのか？」

「畜生！ こうなつたら意地でもセツクスしてやるー。」

そう言つて有紀雄が起き上がつた。

私はその有紀雄の顔面に躊躇う事なく拳を埋ずめる。

「おふつ！」

有紀雄は変な声を出して吹つ飛び、玄関のドアにぶつかった。

「この野郎！」

有紀雄が起き上がり駆けてきた。

私は上にジャンプして避けた。

「うおっ！」

有紀雄は転んで床を滑つて行き、壁にぶつかつて止まつた。

「避けんなよ！」

「避けなきやお前に押し倒されて GAME OVERだ」

「俺はゲームのボスか？」

「否、雑魚モンスターだ。ドラ Hで言つとス イム辺りか」

「一撃で死ぬわ！」

「何を言つ。メタルス イムは頑丈だぞ？」

「そつちなかよ・・・。つーか、早く着替えろ」

「ああ、わかつ・・・へくちつー！」

私は可愛らしい嘘くじやみをしてしまつた。

「バー力。だから全裸で彷徨くなつて言つたんだ

「面白無い」

私はそう言うとバスタオルを巻いてさつと部屋に行き、服を着て有紀雄の下に戻つた。

「へ・・・へくちつ！」

再び可愛らしい嘘を放つた。

「風邪だ。寝てろ

「風邪如きに敗ける私では

その時、倦怠感が私を襲い、その場に倒れてしまった。

「有紀雄、スマンがベッドまで運んでくれ

「嫌だ」

「殴るぞ？」

「そんな状態で出来るのか？」

私は匍匐ほふくで有紀雄に近付き、背中に乗つて頭を思いつ切り叩いた。

「いてつ！」

「殴られたくなかったらベッドまで運べ

「イエッサー！」

有紀雄はそう返事をして私を背負い、部屋まで行くと私をベッドに寝かせた。

「有紀雄、部屋はお前が？」

「否、夏奈子だ」

「そうか。じゃあお仕置きだな」

私はそう言って有紀雄の腕を掴んで体を寄せ、上下反転して乗り掛かつて顔面を痣が出来るまで殴つた。

「姉貴、暴力はやめろよ」

「暴力じやない。お仕置きだ

「虐待だぞ？」

「虐待じやねえ！」

ガスンッ！

私は思いつ切り殴つた。

「すびばぜん」

有紀雄はそう言つて氣絶した。

私は有紀雄の体をベッドから落とした。  
しきし氣絶していいる為か、反応は無かつた。

「つまんね」

私はそう呟くと、布団を被つて眠つた。

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5412d/>

---

バイセクシュアル

2010年10月28日06時39分発行